

設立30周年記念

研究紀要

第25号

事業団の沿革

30年のあゆみ

縞条体圧痕文の付く野島式土器

金子直行

—早期後葉における縞条体圧痕文の付く細隆起線文土器の関係性について—

縄文前期中葉から後葉土器群の系統関係とその意味

細田勝

加曾利E式土器の終焉と称名寺式土器の関係

上野真由美

土偶研究とジェンダー考古学（1）

小野美代子

荒川流域出土の大席式土器について

栗岡潤

関東地方における古墳時代前期の木器と低地遺跡

福田聖

旧埼玉県立博物館収蔵品の鉄刀と刀装具について

瀧瀬芳之

—埼玉県内出土象嵌遺物の研究（その2）—

国界地域の土器流通

赤熊浩一

—下総国と武藏国の様相—

地震で沈んだ倉と古代の集落

田中広明

2011

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 白井沼遺跡出土大麻式土器



2 大型壺口縁部（白井沼）



3 複合口縁壺（白井沼）



4 鋼冶屋・新田口遺跡（非掲載）



5 大型壺口縁部（川合遺跡）



6 大型壺口縁部（川合遺跡）



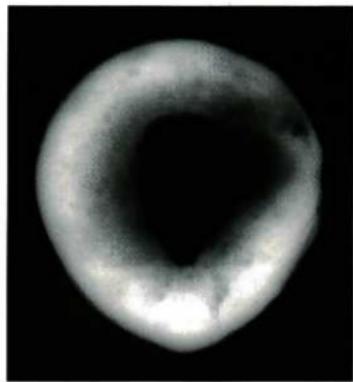
7 大型壺口縁部（川合遺跡）



8 大型壺口縁部（川合遺跡）

口絵2

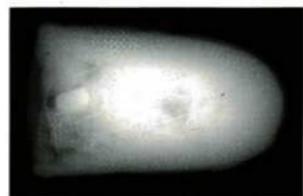
瀧瀨論文 X線透過写真



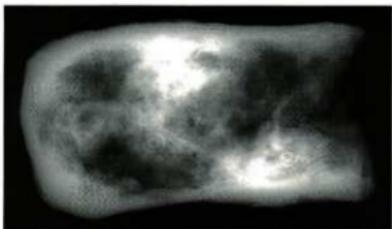
SPM88-041-12



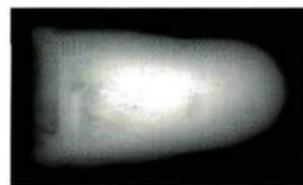
SPM88-041-16



SPM88-041-63



SPM88-041-64



縦条体圧痕文の付く野島式土器

—早期後葉における縦条体圧痕文の付く細隆起線文土器の関係性について—

金子直行

要旨 縄文時代早期後葉の細隆起線文土器の中で縦条体圧痕文の付く野島式土器を分析し、その前段階の関東地方を中心とする木の根A式土器と、駿豆地方を中心とする清水柳E類土器との関係性を検討した。まず、縦条体圧痕文の付く野島式土器は、木の根A式土器と清水柳E類土器の分布圏が重なる地域及び両者に挟まれた埼玉県中央部・多摩・湘南地方を結んだ南北に細長い地域に分布することを明らかにした。次に、木の根A式と清水柳E類土器の内容を検討した結果、清水柳E類の縦条体圧痕文土器は木の根A式の要素を持つ湘南から駿豆にかけての地域で成立した土器群である可能性が高いことを指摘した。また、野島式土器に付く縦条体圧痕文の要素は、分布状況から清水柳E類土器との関係において系譜する可能性を推察した。さらに、細隆起線区画内に集合沈線を充填施文するタイプの野島式土器は、関東地方の2本対となる細隆起線文間の無文帯による区画要素と、駿豆地方に展開する地文縦位沈線文土器の地文手法が、木の根A式段階から継承される区画内充填文手法と融合し、成立してきた可能性を指摘した。これ等の細路起線文土器と沈線文土器の融合過程の分析から、木の根A式段階を介することによって、従来不明瞭であった子母口式から細隆起線区画内集合沈線充填施文タイプの野島式土器成立までの変遷について、仮説を立てることが可能になった。

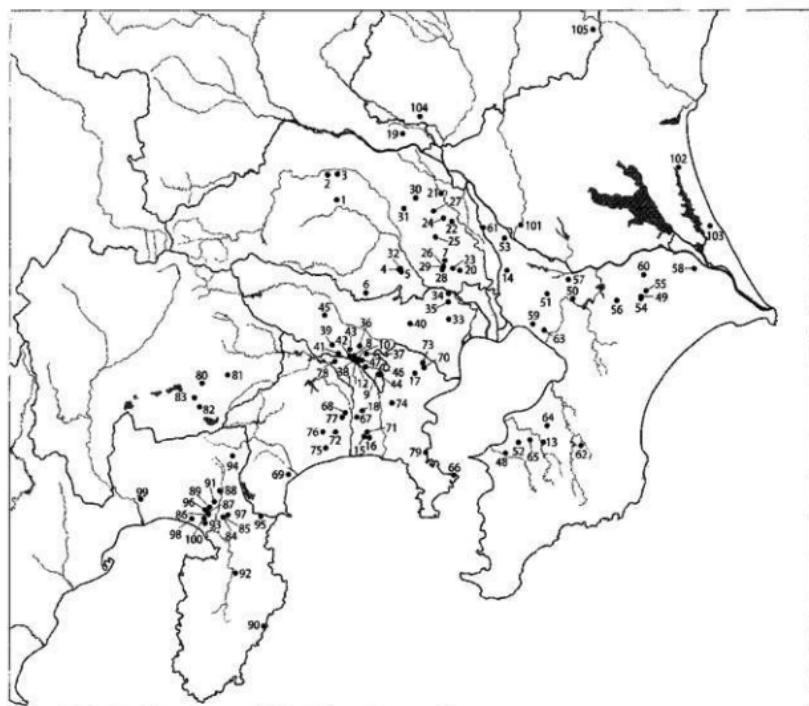
1 はじめに

縄文時代早期後葉の野島式土器は、茅山式四細分の最古段階に編年付けられる土器群であるが、その前段階となる子母口式からの系統性が不明瞭な土器型式でもある。かつては、子母口式を介さず田戸上層式からの系統上に野島式が成立するという子母口式不在論が導き出された経緯もあったが、今日的には層位的な調査事例や内容のまとまった遺跡の調査事例が増加することによって、子母口式の編年の位置は確固たるものとなっている。しかし、そのような状況にあっても野島式への沈線文土器の系統性は十分に解明されているとは言い難い面がある。また、子母口式から野島式に継承される重要な文様要素である細隆起線については、両者を明瞭に識別するのが難しいという問題を残している。

子母口式の中で細隆起線文土器は、新しい段階への位置付けが考えられてきたが、安孫子正二氏の子母口式土器の再検討における新段階としての

仮称木の根A式の提唱（安孫子1982）を契機に、改めて野島式の細隆起線文土器との関係について論じられる機会が多くなった。

筆者は安孫子氏の論を一步進める形で、1993年に仮称「木の根A」式について再検討（金子1993）を行い、東日本的な規模で細隆起線文土器の成立とその展開を検討し、細隆起線の出自を田戸上層式の隆線文の系統に求めた上で、野島式までの間に城ノ台北→子母口→木の根Aの3段階の変遷を想定した。また、3段階目の木の根A式段階は、子母口式から野島式への移行期の安定した段階で、東日本的にも大きな画期となり野島式の型式要素が萌芽する段階でもあることから、野島貝塚より一段階古い野島式の最古段階に位置付けられるという見解を示してきた（金子2004）。その理由として、木の根A式段階の土器群は、北東北では吹切沢式からムシリI式、南東北では常世式から楓木下層式、関東地方では子母口式から野島式への



| | |
|----|----------------|
| 埼玉 | 20 鎌貝北 |
| | 21 高幡寺 |
| | 22 坂東町 |
| | 23 久留原 |
| | 24 猿室伴室 |
| | 25 宮ヶ谷跡 |
| | 26 井原方8次 |
| | 27 萩原 |
| | 28 明花向 |
| | 29 井原方6区 |
| | 31 金平 |
| | 32 白浜木 |
| | 33 横須坂 |
| | 41 貝塚山第2 |
| | 51 貝塚第20 |
| | 61 宮前 |
| | 71 水奈西 |
| | 30 小林八東2 |
| | 31 天神北 |
| | 32 貝塚第1 |
| 東京 | 33 下戸原町 |
| | 34 赤羽台 |
| | 35 仲宿 |
| | 36 多摩ニューNo.426 |
| | 37 多摩ニューNo.457 |
| | 38 多摩ニューNo.94 |

| | |
|----|----------------|
| 東京 | 8 田中谷戸 |
| | 9 南大谷船荷原 |
| | 10 多摩ニューNo.237 |
| | 11 多摩ニューNo.351 |
| | 12 多摩ニューNo.939 |
| | 29 神谷原 |
| | 40 井の頭池A |
| | 41 伝政大学多摩C |
| | 42 多摩ニューNo.192 |
| | 43 多摩ニューNo.810 |
| | 44 成瀬西 |
| | 45 代誠・富士見台 |
| | 46 鶴田寺南 |
| | 47 小山田No.15 |
| 千葉 | 48 跡ヶ作 |
| | 49 東咲御崎越東 |
| | 50 吉出馬ヶ台 |
| | 51 徳山谷 |
| | 52 玉ノ谷 |
| | 53 勢至久保 |
| | 54 木の根 |
| | 55 十余三町荷峰 |
| | 56 大袋塚 |
| | 57 犀牛側第2 |
| | 58 緒ノ台高麗塚 |
| | 59 佐倉道南 |

| | |
|-----|-----------|
| 千葉 | 60 鹿ノ木 |
| | 61 岩名第14 |
| | 62 新井花印田 |
| | 63 花咲新田台 |
| | 13 井ノ |
| | 14 忍井郷ノ之内 |
| | 64 上川瀬II |
| | 65 台木A |
| 神奈川 | 66 小原第1 |
| | 15 久保保 |
| | 16 造藤谷 |
| | 17 西ノ谷 |
| | 18 小園 |
| | 67 彦久保深谷 |
| | 68 恵名津原 |
| | 69 犀形 |
| | 70 子母口貝塚 |
| | 71 正心藤代 |
| | 72 箱上原 |
| | 73 新作小高台 |
| | 74 東希望ヶ丘 |
| | 75 向原B |
| | 76 北多磨跡群 |
| | 77 諸星敷 |
| | 78 向原牛村 |
| | 79 岩島貝塚 |

| | |
|----|-----------|
| 山梨 | 80 宮の原 |
| | 81 玉川金山 |
| | 82 雜事東 |
| | 83 古應敷 |
| 静岡 | 84 小泊 |
| | 85 朝倉村 |
| | 86 清水郡 |
| | 87 清水御北 |
| | 88 上川 |
| | 89 梅ノ木沢I |
| | 90 峠 |
| | 91 人ノ瀬B |
| | 92 鮎台 |
| | 93 覓区 |
| | 94 山ノ神 |
| | 95 人越 |
| | 96 馬上第2 |
| | 97 義賀2(B) |
| | 98 義賀村B |
| | 99 下原源 |
| | 100 木戸上 |
| 茨城 | 101 奥山IC |
| | 102 安塚 |
| | 103 常陸代見 |
| 栃木 | 104 黒磯台 |
| | 105 鮎谷 |
| 群馬 | 109 大鋸Ⅱ |

第1図 主な細縫起線文土器出土遺跡分布図

移行期の土器群として、広範に足並みを揃えて画期を迎えることを根拠とした。

しかし、この段階は絡条体圧痕文が存在することから子母口式の範疇として認識されることが多く、毒島正明氏も子母口式の新段階を設定（毒島2004）してこれ等の土器群を位置付け、駿豆地方に特有ないわゆる清水柳E類土器をその並行関係に置き、学史的な検討から駿豆地方の清水柳E類土器をミヲ坂式、清水柳E類以降の野島式並行の土器群を木戸上式と命名することを提唱している（毒島2004、2005）。また、井上賢氏も野島式土器を2細分する中で、野島式の上限について絡条体圧痕文を施文する土器群を暗に外す考えを示している（井上1997、2010）。そのような区分の中にはあっても、子母口式と野島式、清水柳E類と木戸上式、野島式と木戸上式との境界については依然として不明瞭な部分が残り、関東地方や駿豆地方において細隆起線文土器の区分と位置付けが難しいという問題は解決されていない。

これ等の見解が異なる要因は、型式要素の残存の捉え方と土器群の構成に対する把握の相違によるものと思われる。一般的に先行型式の要素は様々な形で次型式に受け継がれるが、その一例に子母口式の一文様要素である絡条体圧痕文が挙げられる。絡条体圧痕文は子母口式の代表的なメルクマールであり、その収束を以って子母口式の終焉とする見解が多い。しかし、絡条体圧痕文は野島式土器にも少なからず残存しており、その終焉を以って子母口式の終焉とはならないことを示し

ている。

また、駿豆地方の清水柳E類土器も、絡条体圧痕文を主な型式要素とするが、その伴出土器群との関係から編年的位置付けが問題となっている。さらに、木の根A式、野島式、清水柳E類はいずれも細隆起線文と絡条体圧痕文の併施文土器を含むことから、それぞれの型式区分が難しい土器群となっている。

筆者は土器群の系統的な把握から、木の根A式を広義の野島式と解釈し、その最古段階に位置付け、清水柳E類土器についても木の根A式との並行関係を認めつつ、一部狭義の野島式とも並行する可能性を探ってきた。

従って、今回の分析では管見に触れたいたいわゆる野島式の絡条体圧痕文施文土器を分析し、その直前段階に位置付けられる木の根A式や、駿豆地方の清水柳E類の絡条体圧痕文を併施文する細隆起線文土器との関係性を再度検討して、子母口式段階から野島式段階への土器群の系統性、特に細隆起線と沈線の複合するタイプの野島式土器の成立過程について若干の予察を行いたいと考えている。幸いにも、近年、清水柳E類土器を出土する良好な遺跡が報告されるとともに、ミニシンポジウムも開催されるなど、該期の細隆起線文土器の検討条件は整ってきたものと判断される。

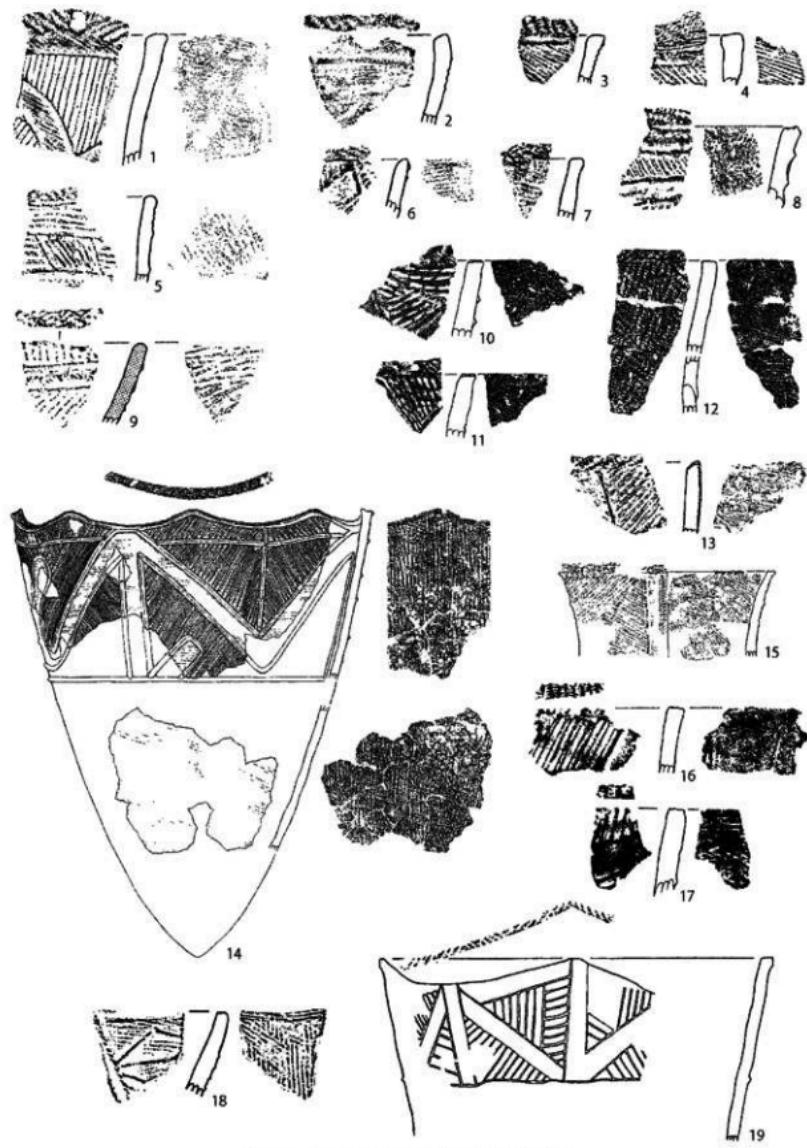
なお、今回検討する主な遺跡の分布を第Ⅰ図に示し、遺跡番号を<>内に示した。また、図示した遺物は、拓影図を3分の1、器形を起こした拓影図及び実測図を原則5分の1の縮尺で統一した。

2 絡条体圧痕文の付く野島式土器

絡条体圧痕文は特徴的な文様要素であり、子母口式を直接的にイメージすることから、編年的位置付けに混乱を来たしてきた要素でもある。特に貝殻条痕文系土器群の中では、子母口式、野島式、茅山下層式以降早期の終末期まで認められる要素で、茅山下層式から上層式に平行する常世2式を

中心とした土器群では、顕著に認められる主体的な文様要素となっている。

近年、この絡条体圧痕文を口縁部の刻みとして施文する野島式土器が少量ではあるが増えており、その分布と特徴を分析することで、先行型式の子母口式との関係や、並行する周辺土器群との関係



第2図 絡条体圧痕文の付く野島式土器（1）

1~3:貝塚山2、4:宮川、5~7:御庵20、8:水深西、9:椎現坂、10~12:百済木、13:金平、14:小林八束2、15:天神北、
16~17:御庵1、18~19:大袋II

を探ることができるものと考えている。

<埼玉県>（第2図）

県南の武藏野台地では富士見市貝塚山遺跡第2地点（金子他1985）<4>（1～3）、同御庵遺跡第20地点（加藤1996）<5>（5～7）、所沢市宮前遺跡（並木他1986）<6>（4）、大宮台地では旧浦和市水深西遺跡（駒見1999）<7>（8）、県央部の比企丘陵では嵐山町金平遺跡（植木・金子1980）<1>（13）、櫛引台地では旧川本町百濟木遺跡（村松2003）<2>（10～12）、旧江南町櫻現坂遺跡（森田1996）<3>（9）から、口唇部に絡条体圧痕文の付く土器が出土している。

細隆起線のみの土器は1で、緩い波状を呈し、波頂部に双頭状を呈する幅広の刻みを施す。口唇部は幅広の角頭状を呈し、波頂部を境に異方向の刻み状に絡条体圧痕文を施す。口唇部直下を細隆起線で横位区画し、2本対の細隆起線間の無文帯で曲線的な区画を描き、間隔の狭い集合細隆起線を充填施文する。

2～6、8、9は細隆起線区画内に集合沈線を充填施文するものである。2は1と同様の器形と構成を探り、波頂部の双頭部分がやや大きく開いている。口唇部直下の細隆起線区画下は集合細密沈線を充填する。3は平縁を呈するが、同様な集合細密沈線を施文する。

4、5、8、9は口唇部下にやや間隔を空けて細隆起線区画を配するもので、4は細隆起線下に斜位の集合沈線を施文する。5は口縁部の並行細隆起線間を斜位に遮蔽する細隆起線の菱形区画を施し、区画内に集合沈線を充填施文する。8はさらに口縁下部に並行する細隆起線区画を施し、集合沈線充填文帯と無文帯を交互に配する構成を探る。9は口縁部にやや太めの縦位集合沈線を充填施文し、以下無文帯を挟んで斜位の集合沈線を施文するもので、8とは逆の構成を探る。

6は口唇直下に細隆線を巡らせ、細隆起線の斜位の長方形状区画を施し、区画外に集合沈線を充

填施文する。

10、11、13は細隆起線区画内に集合結節沈線を充填施文するもので、10、11は幅広の半截竹管状工具による集合結節沈線を充填する。両者の口縁部の絡条体圧痕文は幅広の芋虫状を呈する。13は細隆起線の縦位区画内に集合結節沈線と集合沈線を併施文充填する。口唇部の絡条体圧痕文は、半截竹管状の軸の角を施文するもので、軸が圧痕されている。

他に、絡条体圧痕文と酷似する貝殻腹縁の刻みを施す土器がある。16、17は富士見市御庵遺跡第1地点（荒井他1979）<32>の出土であり、いずれも口縁部区画ではなく、口唇部直下から充填文を施文するもので、17は細隆起線文のみ、16は斜行する細隆起線区画内に、同方向の集合沈線を充填施文する。14、15は口唇部に貝殻背压痕文を施文するものである。14は旧菖蒲町小林八東2遺跡（金子他2008）<30>の出土で、8単位の波状口縁を呈し、口唇部外端と口縁部に細隆起線を巡らせて区画して、2本対の細隆起線無文帯を鏽齒状に配する構成を探る。口縁部区画内には、波頂部を中心にして「ハ」字状に対向する2本細隆起線を施文し、左右対称の構成を探る部分がある。また、波底部の口唇部直下から口縁部区画線を貫通する細隆起線を垂下し、左右対称の区画文を構成する部分があり、この区画内にさらに対称形となるような集合沈線を充填施文する。裏面条痕は、口縁部に向けて縦位施文となる。15は桶川市天神北遺跡（橋本1992）<31>出土で、2本対細隆起線間の無文帯で縦位区画し、大柄の区画文内に集合沈線を充填する。

以上のように、埼玉県内で出土した絡条体圧痕文の付く野島式土器は、明瞭な口縁部区画帯を持つものが少なく、細隆起線文のみの土器も少ない傾向にある。また、集合結節沈線を充填要素にするものが現れるなど、総じて野島式の中段階から新段階にかけてのものが多い傾向にある。貝殻背

圧痕文の付く14は口縁部の区画に木の根A式段階の要素を継承するが、細隆起線の無文帯の鋸歯状文が口縁部区画内に貫入し、モチーフ構成の崩れが認められるなど、中段階への位置付けが可能となろう。また、比企丘陵や櫛引台地方面では、新出の要素である結節沈線を施文するものが集中する特徴があり、中段階より新しい位置付けが考えられよう。ちなみに、百濟木遺跡では12の縄文を施文する古屋敷式系土器が相当量出土しており、他の集合結節沈線を施文するものなどと合わせて、新段階の良好な土器群が出土している。県内においても、山梨方面との関連を示す資料が出土したのは始めてであり、注目される。

<群馬県>（第2図）

群馬県南東部の館林市大袋II遺跡（岡屋1988）<19>第1号炉穴群から、器形の復元できる土器が出土している。19は波状口縁を呈し、波頂部と波底部から細隆起線の無文帯を垂下して分割し、さらに鋸歯状に対角を結ぶ構成を探る。区画内は集合細隆起線を充填施文するものと思われ、一部梯子状文風の区画を施す部分もある。14の構成に類似が見られ、口縁部区画が曖昧となっている点も共通する。口唇部の絡条体圧痕文は、一定の間隔で異方向の刻み状となる。18は口縁部破片であり、細かな刻みを施す細隆起線無文帯を斜位に垂下して分割し、1本細隆起線で菱形状のモチーフを描く。細隆起線の交点付近や屈曲部分には細長い刻みを施す。区画内に集合沈線を充填施文するかは不明である。

18、19が同一炉穴群内で共伴関係にあるとすれば、一見古相を帶びる19は18の要素から野島式の新しい段階の所産となる可能性がある。また、細隆起線文のみの施文と、文様の構成から、中段階への位置付けも可能であろう。

<東京都>（第3図）

東京都では、町田市を中心に遺跡が集中している。町田市田中谷戸遺跡（川崎1976）<8>（1）、

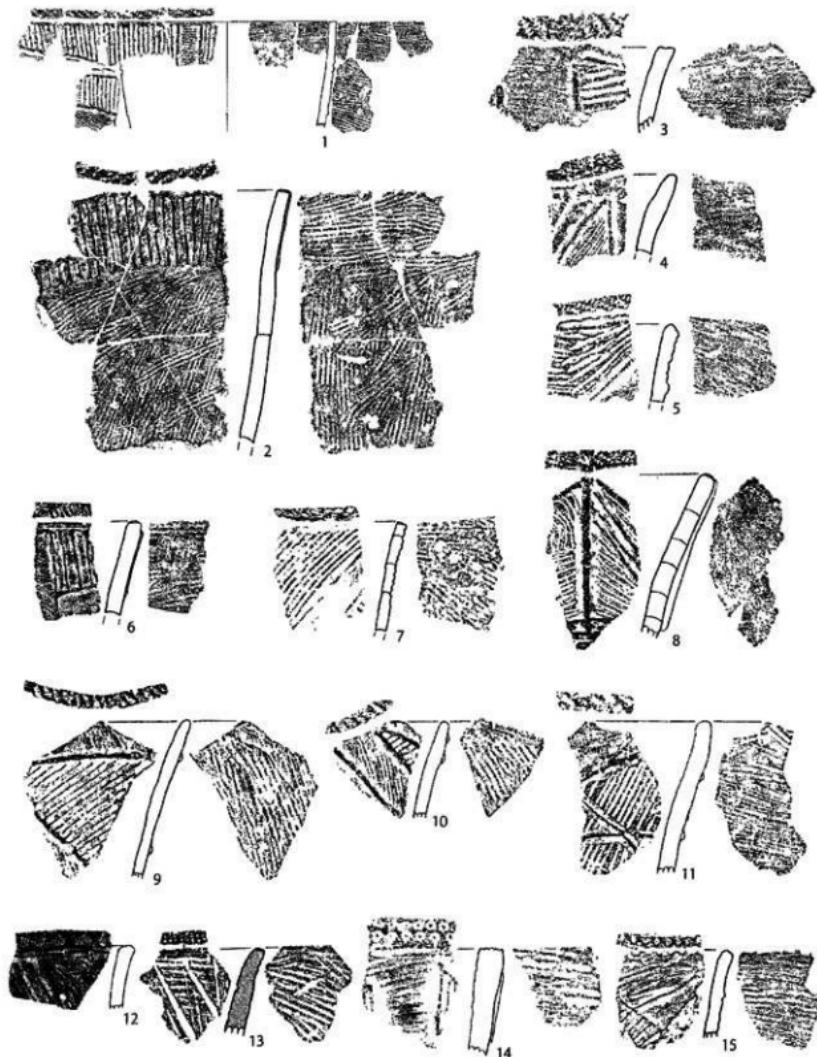
同多摩ニュータウンNo.351遺跡（山本2004）<11>（2）、同多摩ニュータウンNo.237遺跡（原川2004）<10>（3～5）、同多摩ニュータウンNo.939遺跡（原川2000）<12>（6～8）、同南大谷福荷山（泊2006）<9>（9～11）から絡条体圧痕文の付く野島式土器が出土している。

細隆起線文のみの土器群は1、2、6である。2は口縁部に等間隔で一定の施文域に集合細隆起線を垂下するもので、この構成は野島式の古段階の典型的なモチーフの一つである。1、6は細隆起線無文帯を垂下して文様帯を縦分割し、さらに細隆起線無文帯で区画して集合細隆起線を充填施文する。1は口唇部直下から充填文を施し、6は口唇部直下に1本の細隆起線を巡らす。

3～5、7～11は細隆起線区画内に集合沈線を充填施文するものである。3～5は細隆起線無文帯を縦位や斜位に垂下して区画するが、口縁部の区画文は口唇部直下に細隆起線を施し細区画を閉塞する。結果的に、縦位の細隆起線区画と、口唇部直下の無文部が連結し、口唇部付近の処理が6とは異なる。7、8は口唇部直下から大柄な区画と同方向に集合沈線を充填する。8はやや細い隆帶で横位分帶と縦位分割を行い、分帶の隆帶上には刺突文を施す。

9～11は多単位の波状口縁を呈するものと思われ、9は波頂下に横位の細隆起線を配し文様帯として波状を均すが、10、11は波頂下を横位区画せず、細区画文を構成している。

他に、八王子市神谷原II遺跡（佐々木1982）<39>（12）では、口唇部に貝殻背圧痕文を施文する細隆起線文土器、多摩市多摩ニュータウンNo.457遺跡（川島1996）<13>（13）では貝殻腹縁の刻みを施す沈線文土器、三鷹市井の頭遺跡群A（高麗2001）<40>（14）や多摩ニュータウンNo.237遺跡（原川2004）<10>（15）では、口唇部に円形刺突列を施す土器が出土している。12は3本細隆起線を斜位に垂下するもので、口唇外端



第3図 褐条体压痕文の付く野島式土器（2）

1：田中谷戸、2：多摩Na.351、3~5・15：多摩Na.237、6~8：多摩Na.939、9~11：南大谷郷荷山、12：神谷原、13：多摩Na.457、
14：井の頭池A

部が細隆起線状を呈し、古相を呈する。14は3や4と同様で、口縁部区画を施さず、区画文を構成するものである。15はやや崩れているが、細隆起線無文帯の交差部分が方形状の区画文と化している。

以上の様に、多摩地域を中心とした絡条体圧痕文の付く野島式土器は、細隆起線文のみの古相を帶びた段階から、細隆起線と集合沈線が複合するやや新しい段階まで存在している。これ等の破片は、伴出土器に子母口式、清水柳E類、野島式の新段階を含めた各段階の土器群があり、時期を決め兼ねるのが現状である。

<千葉県>（第4図）

千葉県では、遺漏した遺跡もあると思われるが、絡条体圧痕文の付く野島式土器を出土する遺跡は少なく、木更津市林遺跡（能城1994）<13>（1～3）、流山市思井堀ノ内遺跡（栗田2010）<14>（4）が挙げられる程度である。

1～3は細隆起線文土器で、1は口唇部直下で丸く閉塞する細隆起線無文帯を垂下して分割し、口唇部直下から集合細隆起線を充填施文する。2は波頂部から細隆起線の梯子状文を垂下して分割し、左右区画内に対称方向の細隆起線を充填施文する。3は口縁部文様帯を区画し、斜位の集合細隆起線を充填施文する。

4は口唇直下に細隆起線を1本配し、以下に集合沈線による集合鋸歯状文を構成するものと思われる。

千葉県では木の根A式段階で盛行した絡条体圧痕文が、野島式の古段階にはほとんど継承されないようである。ここで取り上げた木更津市林遺跡は、東京湾を挟んだ三浦方面との連携が、流山市思井堀ノ内遺跡は奥東京湾の埼玉方面との連携が窺われる。

<神奈川県>（第4図）

神奈川県では相模川と境川に挟まれた地域に遺跡が集中しており、茅ヶ崎市白久保遺跡（松田

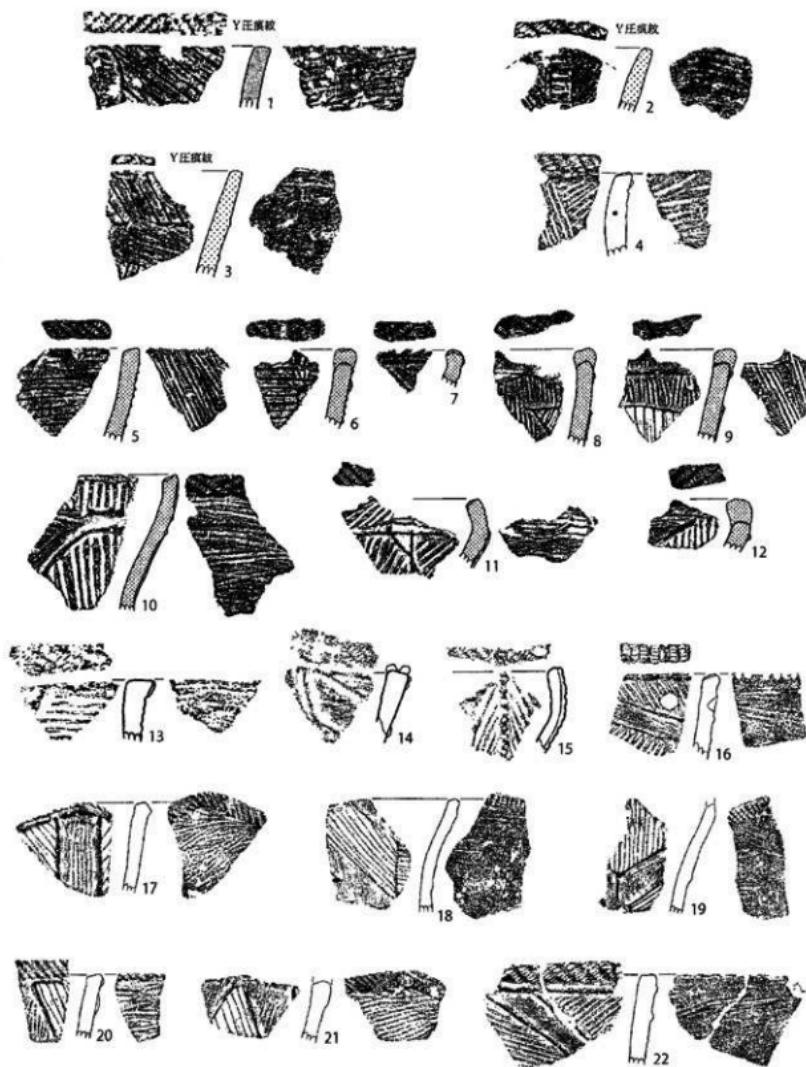
1999）<15>（5～12）、藤沢市遠藤広谷遺跡（戸田2003）<16>（16～22）、綾瀬市小園遺跡（高橋他1995）<18>（13）、横浜市西ノ谷貝塚（坂本2003）<17>（14、15）で出土している。

細隆起線のみの土器群は5～9、14、17～21である。5、6は同一個体と思われ、口縁部に集合細隆起線を横位に配し、口唇部に摘み上げ状の小突起を持つ。7は口唇部直下に細隆起線を1本配して、口縁部を区画する。8、9も同一個体で、小突起を持ち、口縁部に1本の細隆起線を配して文様帯を平縁状に均している。細隆起線の三角状区画内には、細い細隆起線を充填する。

14は口唇部外端に細隆起線を巡らせ、口唇部直下から細隆起線を垂下して文様帯を区画する。

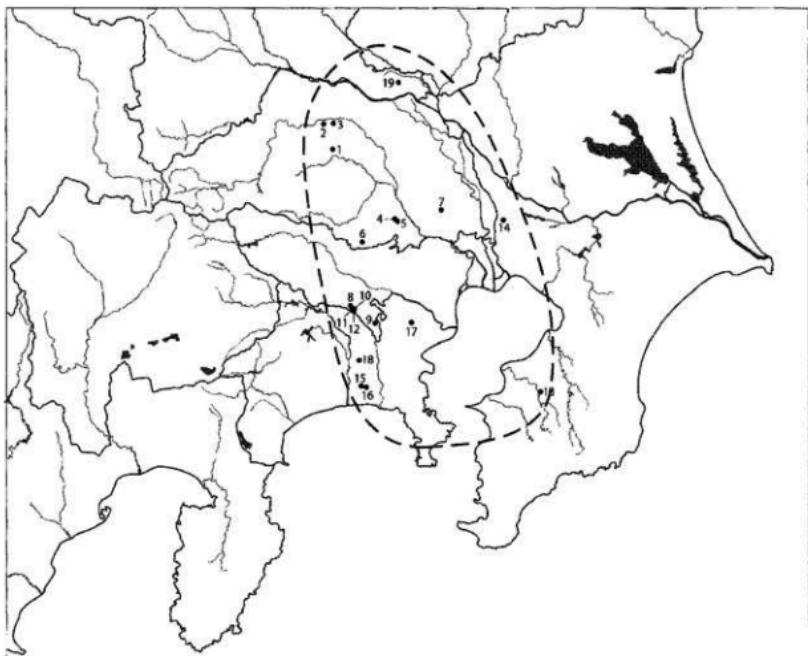
17、20と18、19、21は同一個体と思われる。17は波頂部から細隆起線無文帯を垂下して文様帯を分割し、区画内に細い集合細隆起線を充填施文する。口唇下の区画部分は口唇部直下に細隆起線を配し、区画を閉塞する。18、19は波状口縁で胴部が強く括れる器形を呈するものと思われ、細隆起線無文帯の細区画内に、細い細隆起線を充填施文する。口唇部直下から充填文を施文しており、口唇部直下に細隆起線の口縁部区画は施さないようである。

細隆起線と沈線が複合するものは10～12、13、15、16、22である。10は縦位の集合沈線を充填する口縁部区画帯を設け、胴部に曲線的な区画を施し、集合沈線を充填施文する。11、12は同一個体と思われ、口縁部が小波状縁で内折し、胴部が括れる器形を呈するものと思われる。11は波頂部下に細隆起線を横位に配し、文様帯を平縁状に均している。13は平縁で、口唇部外端に細隆起線を巡らし、文様帯を分割する細隆起線を口唇部直下から垂下する。15は大きな波状縁を呈し、波頂部から刻みを施す隆帯を垂下するもので、胴部は大きく括れるものと思われる。縦位の隆帯を挟んで、左右対称的な区画文を施すものと思われる。



第4図 絡条体圧痕文の付く野島式土器（3）

1~3: 林日、4: 恵井塚ノ内、5~12白久保、13: 小圓、14・15: 西谷、16~22: 遠藤広谷



第5図 絡条体圧痕文の付く野島式土器出土遺跡分布図

16は細隆起線無文帯を斜位に施して区画し、口唇部直下から集合沈線文を充填施文する。口唇部には貝殻腹縁文の刻みを施している。22は口唇部直下に細隆起線を1本巡らして口縁部を区画し、区画線から細隆起線無文帯を斜位に配して細区画を行っている。区画内には集合沈線を施文する。16は細隆起線の口縁部区画を行わないが、22とほぼ同様な文様構成となっている。

以上、神奈川県でも相模川と境川に挟まれた地域は、清水柳E類土器の分布域でもあり、絡条体圧痕文のあり方を検討する重要な地域と言える。この地域で絡条体圧痕文の付く野島式土器は、古相の文様構成を持つものが少なく、器形や文様構成などから中段階以降に位置付けられるものが多いと思われる。

＜小結＞

以上、野島式土器の主体的分布圏内で、絡条体圧痕文の付く土器群を抽出して分析してきた。絡条体圧痕文の付く野島式土器を出土する遺跡を、第5図に示した。野島式の分布に比べて、絡条体圧痕文の付く土器の分布は狭く、埼玉県の武藏野台地を中心とした中央部から、東京都の多摩地域と神奈川県の相模川と境川に挟まれた地域を結んだ地域を中心域としている。千葉県においては、現在のところ埼玉県に寄った北西端地域や、三浦半島との往来が容易な木更津市周辺地域に分布が限られているのが特徴として指摘される。

埼玉県でも大宮台地を中心とした東部地域や、千葉県の下総台地を中心とした地域は、後述する木の根A式の主体的な分布地域となっているが、

野島式古段階土器群への絡条体圧痕文の継承が非常に少ない地域と見ることができよう。

野島式土器に見られる絡条体圧痕文の要素は、関東西部地域を除くと、古相を帯びる土器群に付くことは少なく、全体的には細隆起線と沈線の複合するタイプのいわゆる野島式中段階の土器群に施文される傾向にある。中には集合結節沈線文を施文する土器や、器形に括れが見られるもの、2段構成の文様帶を持つ土器群が伴出するような段階にまで、絡条体圧痕文を施文するものがある。さらに、埼玉県北部から、群馬県南部にかけて、明らかに新様相を持つ野島式土器に施文されているという地域性がある点も特徴として指摘される。

また、多摩地域から相模川周辺にかけての地域は清水柳E類土器が分布する地域であり、埼玉県西部地域、東京湾を渡った木更津市周辺は、その隣接地域と認識される地域である。特に、多摩地域では細隆起線文のみの野島式古段階の土器群に絡条体圧痕文の付く例があり、この地域における木の根A式段階からの要素の継承と見ることもできるが、地理的な条件から清水柳E類の絡条体圧痕文との直接・間接的な影響関係も考慮する必要がある。いずれにしても、下総地域を中心とした関東東部地域とは異なる地域性のあることが把握

される。

そして、多くの絡条体圧痕文の付く野島式土器は細隆起線と沈線の複合するおよそ中段階位に比定される土器であることから、絡条体圧痕文要素の系譜関係を明らかにするためにも、この多摩から湘南地域における初現期の細隆起線と沈線の複合タイプの土器を明らかにすることが急務であると思われる。この地域の野島式古段階に細隆起線区画内集合沈線充填施文タイプの土器群が成立しているか否かは、野島式土器の細分に大きな影響を及ぼすものと思われる。

野島式の中段階須から、奥東京湾沿岸地域で器壁の条痕文を磨り消す手法が現れる。また、同時に頭部に段階状の屈曲を持ち、太沈線を中心とする沈線文土器が多出する傾向があり、駿豆地方を含めた東海地方の木戸上式とされる沈線文土器との影響関係が想定されるところである。いずれにしても、絡条体圧痕を施文する野島式土器は、野島式土器の細分の問題とともに、現在のところ細片が多く、伴出土器も明らかにできないことから、所蔵時期を推定に頼らざるを得ないという大きな問題が残されている。そして、細隆起線文のみの土器群には絡条体圧痕文を施文するものが少ないと想される。

3 仮称「木の根A式」土器について

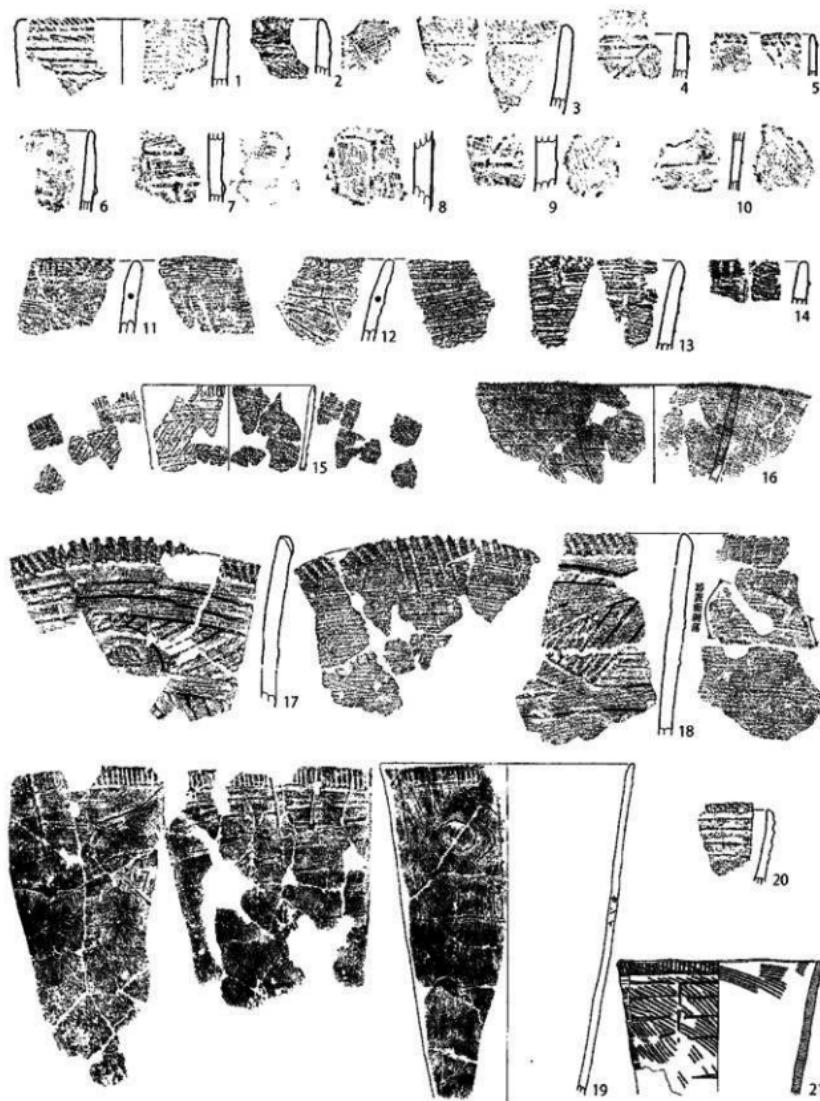
仮称「木の根A式」は、千葉県成田市木の根遺跡A地点（宮1981）<54>出土土器群を標識として、1982年に安孫子正二氏によって仮称された土器型式である。細隆起線と絡条体圧痕文を主たる文様要素とすることから、子母口式の新段階として位置付けられた土器群であり、毒島氏の子母口式新段階もほぼ同様の基準のものと思われる。

筆者はかつて木の根A式について検討を加えたことがあるが、近年良好な資料が出土していることから、再度若干の検討を加えることとする。

木の根遺跡A地点出土土器群（第6図1~10）

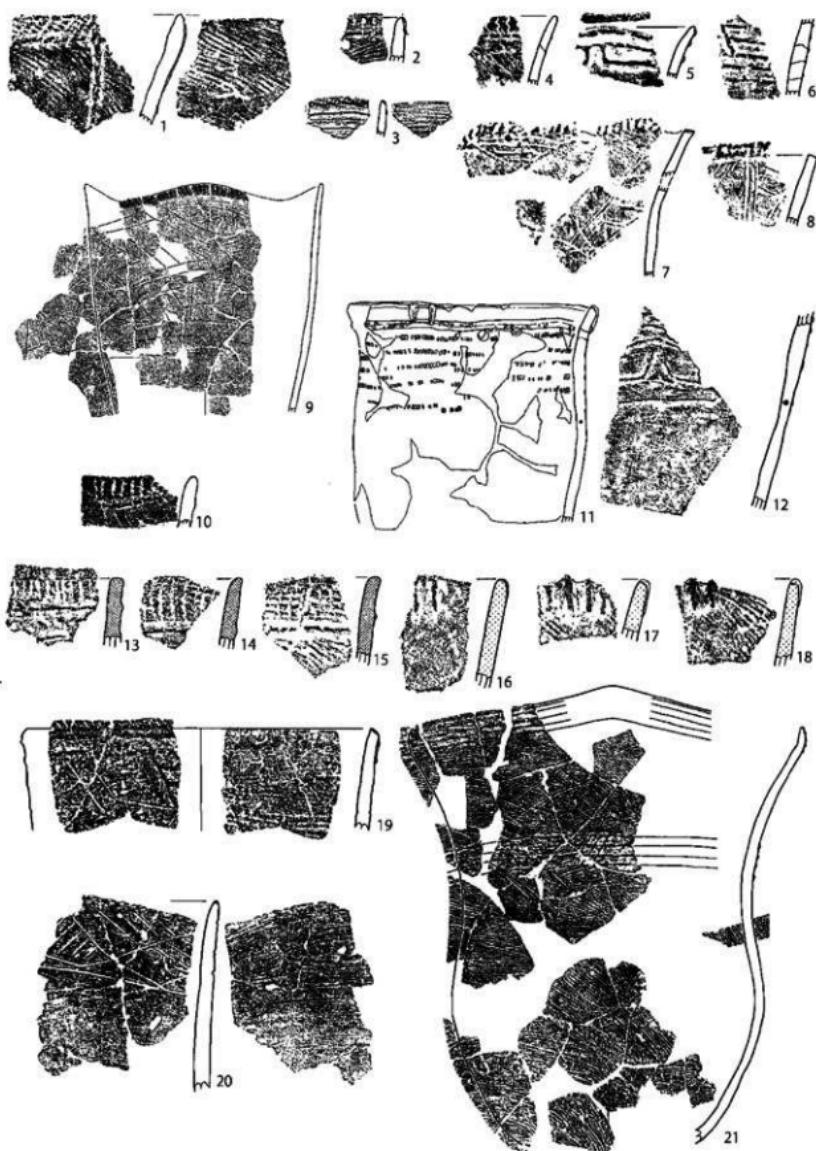
は、数量は少ないものの比較的まとまっている土器群と評価された。そこで、細隆起線土器をモチーフによって分類すると、以下になる。

- ①口縁部に2~4本の細隆起線を巡らすもの(1)で、絡条体圧痕文を施文するものもある(2)。
- ②口縁部に1本の細隆起線を巡らして口縁部を区画し(3, 6)、口唇部から細隆起線を垂下するもの(5)。
- ③幅広の文様帶に縦横斜位の細隆起線を組み合わせて区画文を構成するもの(4, 7~10)。
- ④薄手の土器で、繊維を殆ど含まないもの(5)。



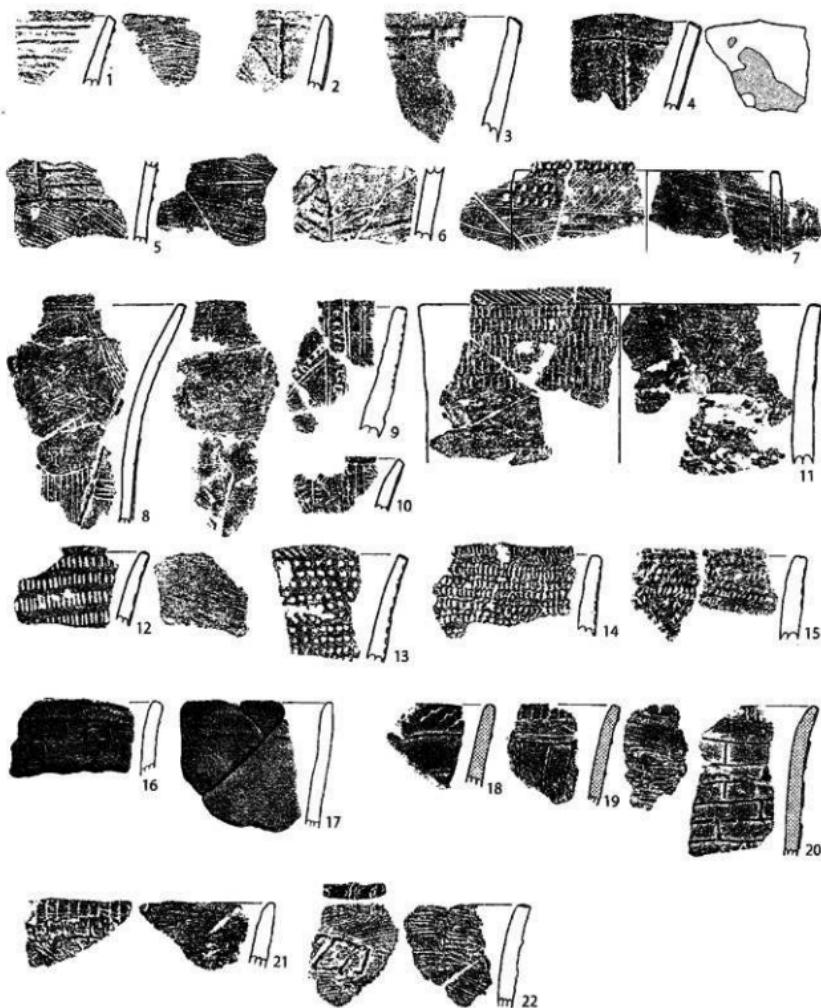
第6図 木の根A式土器(1)

1~10:木の根、11~12:扇ヶ作、13~14:吉田馬々台、15:東峰御幸畠東、16:玉ノ谷、17~18:復山谷、19:勢至久保、
20:十余三橋荷峰、21:花吹新田台



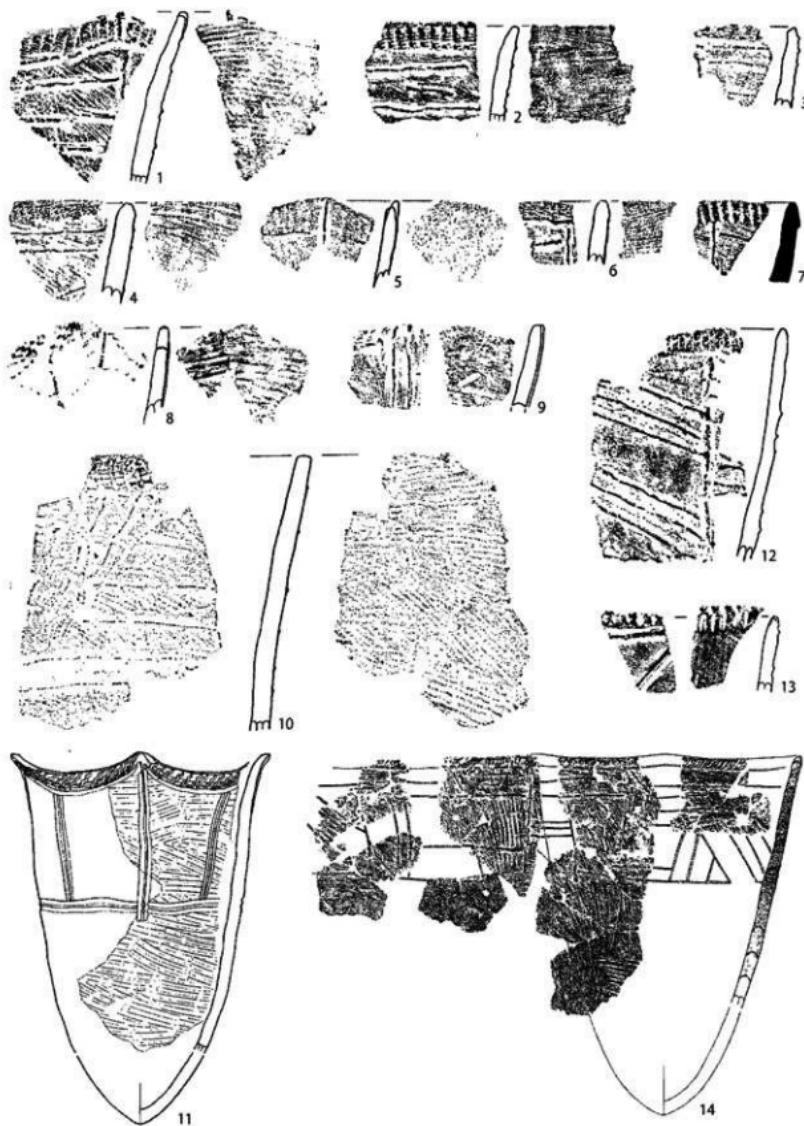
第7図 木の根A式上器(2)

1: 大袋腰巻、2・3: 城ノ台南、4~8: 椎ノ木、9: 京北館第2、10: 佐倉道南、11・12: 用瀬日、13~18: 岩名第14、19~21: 新井花和田



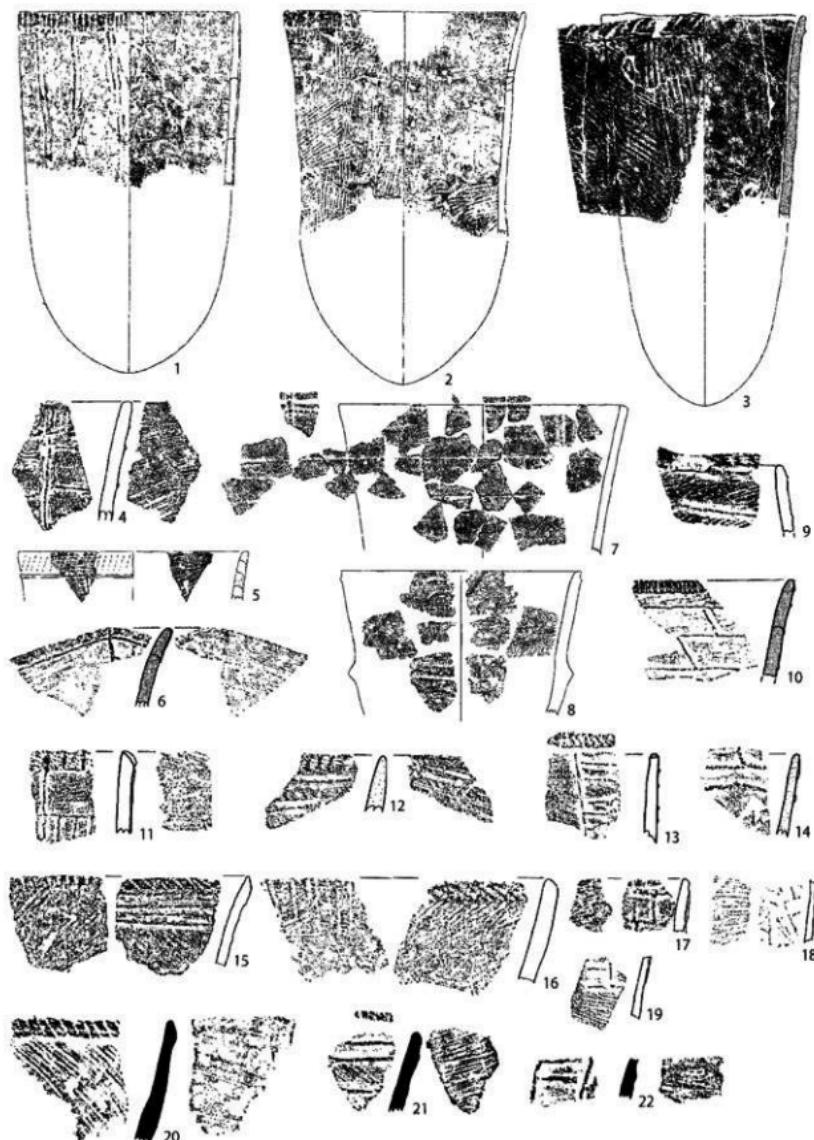
第8図 木の根A式上器（3）

1~15：新井花和田、16・17：小原第1、18~20：白久保、21・22：黒持台



第9図 木の根A式土器 (4)

1・2: 嵐貝北、3: 高輪寺、4~6: 芳荒勾、7: 麻室仲宿、8: 宮ヶ谷塔、9: 茶屋、10・11: 明花向C、12: 井沼方8次、
13: 井沼方6区、14: 伏原



第10図 木の根A式土器(5)

1・2：赤羽台、3：仲宿、4：下戸塚Ⅲ、5：法政多摩C、6：多摩№457、7・8：田中谷戸、9：多摩№426、10：多摩№194、
11～14：奥山C、15～19：安塚、20～22：常陸伏見

以上のように大きく4分類された土器群は、それぞれの系統性を持つものと思われ、この時期の土器組成として把握できることを想定した。

これ等の特徴を基準にして、各地の代表的な土器群を集成したのが第6図～第10図である。

<①の特徴を持つ土器群>

口縁部に3本を中心とする細隆起線を巡らすものは、千葉県成田市十余三稻荷跡（宮2006）<55>（第6図20）、同香取市（旧小見川町）城ノ台南貝塚（岡本他1994）<58>（第7図3）、同市原市新井花和田遺跡（牧野2001）<62>（第8図1）、茨城県鉢田市安塚遺跡（橋本1980）<102>（第10図15）、同鹿嶋市常陸伏見遺跡（小野1980）<103>（第10図21）などで出土している。第7図21の新井花和田遺跡出土土器は、この土器の全体器形を知ることができる貴重な例で、口縁部と胴部区画に4本の細隆起線を配し、胴部区画には3本の細隆起線で斜位の区切り文を構成する。口縁が内湾して開き、胴部が括れる器形である。これらの土器群は千葉県の北部から茨城県にかけて分布の主体があり、口縁部裏面に縦条体圧痕文を施文するものが多い。

<②の特徴を持つ土器群>

口縁部を1本の細隆起線で区画するのみのものや、縦位の細隆起線を垂下する構成があるが、細隆起線を垂下するものは、③の構成を兼ねるものが多い。千葉県成田市大袋腰巻遺跡（宮1998）<56>（第7図1）、同市原市新井花和田遺跡<62>（第8図4）、東京都多摩市多摩ニュータウンNo457遺跡（川島1982）<37>（第10図6）などがあり、神奈川県川崎市子母口貝塚（金子1992）<70>例は既に著明である。大袋腰巻（第7図1）例は、胴部破片から1本の細隆起線で胴部区画を施しているようである。

<③の特徴を持つもの土器群>

口縁部に細隆起線を巡らして口縁部文様帶区画を行い、縦条体圧痕文、貝殻腹縁文、沈線文、細

隆起線文を縦位施文し、以下に幅広の文様帶を構成するものが多い。文様構成の主たるものは、やや間隔を空けた縦横の細隆起線で文様を描くものである。

千葉県内で縦条体圧痕文を施文するものは君津市踊ヶ作遺跡（宮2006）<48>（第6図11、12）、印旛村吉田馬々台遺跡（古内1980）<50>（第6図13、14）、君津市玉ノ谷遺跡（松本2004）<52>（第6図16）、城ノ台南貝塚（第7図2）、などがあり、貝殻腹縁文を施文するものは成田市椎ノ木遺跡（高橋1987）<60>（第7図4）、船橋市佐倉道南遺跡（新津1975）<59>（第7図10）、野田市岩名第14遺跡（岡田1994）<61>（第7図13～15）等で出土しており、細隆起線を施文するものは習志野市花咲新田台遺跡（小川1997）<62>（第6図21）等で出土している。

また、縦横構成以外の幾何学的な区画文を施文するものは白井市復山谷遺跡（田村1982、小笠原2002）<51>（第6図18）、市原市新井花和田遺跡（第8図6）等で出土しており、第6図18は三角形区画文内に集合細隆起線を充填施文し、細隆起線上にも縦条体圧痕文を施文する。第8図6も同様な三角形区画文内に細隆起線を充填施文するものである。このモチーフ自体では、縦条体圧痕文がなければ、野島式との識別が難しい。

さらに、野田市勢至久保遺跡（飯塚1982）<53>（第6図19）は縦横区画文に菱形状の区画文を組み合わせており、区画内に円形文を充填施文する。また、他の区画部分には集合細隆起線を充填施文している。印西市泉北側第2遺跡（高橋1991）<57>（第7図9）は波状口縁を呈し、波頂部を中心として上下に対向する対弧文を、3本単位の並行細隆起線で描き、さらに区画端部が交差して入り組むモチーフも構成する。

また、成田市東峰御幸畑東遺跡（宮2004）<49>（第6図15）、白井市復山谷遺跡（第6図17）は、3本の細隆起線で横位多帶区画を行い、細隆起



第11図 木の根A式土器出土遺跡分布図

線上に絡条体圧痕文を施文する。第6図15は集合鋸歯状文を構成すると思われるモチーフが、17は半円形のモチーフと斜行細隆起線の組み合わさるモチーフが描かれる。

この時期の他の細隆起線文土器には、成田市椎ノ木遺跡（第7図5）や袖ヶ浦市上用瀬遺跡II（井上2000）<64>（第7図12）のように「π」字状のモチーフを表現するものもある。また、野田市岩名第14遺跡（第7図16～18）のように口唇部を取り巻き、小突起状を呈する短い細隆起線も特徴的である。また、新井花和田遺跡（第8図3）の並行する細隆起線を段違いのクランク状に区切るモチーフも特徴的である。このクランク状文は、

場合によっては斜行する菱形状区画（第8図8）を構成することもある。

木の根遺跡では不明瞭であったが、これ等の細隆起線文土器には、沈線文土器が組成する。第7図19～21は新井花和田遺跡第066号住居跡からの一括出土土器群であり、21の①細隆起線文土器とともに、19の③細隆起線文土器に沈線文が併施文されるもの、20の沈線文土器が組成する。19の脣部には細隆起線の梯子状モチーフが施文されており、20の沈線文土器は粗い三角形状区画内に、集合沈線が充填施文される。これ等の土器群には、野島式の初現的な要素が全て含まれているといつても過言ではない。

埼玉県の③では縦横区画を中心としたものが多く、口縁部の幅狭文様帯に絡条体圧痕文を施文するものは川口市猿貝北遺跡（金子1986）＜20＞（第9図1、2）、久喜市高輪寺遺跡（青木1979）＜21＞（第9図3）、春日部市坊荒句遺跡（中野1995）＜22＞（第9図4～6）、岩槻市鹿室中宿遺跡（安岡1963）＜24＞（第9図7）、旧大宮市宮ヶ谷塔第5貝塚（山形1982）＜25＞（第9図8）、白岡町茶屋遺跡（鈴木1984）＜27＞（第9図9）、川口市呪原遺跡（吉田1985）＜23＞（第9図14）などで出土している。貝殻腹縁文を施文するものは旧浦和市明花向C区（金子1984）＜28＞（第9図10、11）で出土しており、細隆起線の縦横区画を施すものや、沈線の幅広縦位区画文を施すものもある。また、口縁部に沈線文を施文するものは旧浦和市井沼方遺跡第8次（小倉1986）＜26＞（第9図12）で出土しており、1本の細隆起線を垂下し、枝状に3本を単位とする細隆起線を斜位に施文する。

さらに興味深い破片が旧浦和市井沼方遺跡6区（小倉1981）＜29＞（第9図13）から出土している。I3は細隆起線のみの土器で、口縁部裏面に縦位の短い刻みを施すものである。この刻みはいわゆる常世式に系譜が辿れる刻みで、千葉県復山谷遺跡出土の第6図17、18や茨城県安塚遺跡出土の第10図15、16の口縁部裏面に施文される絡条体圧痕文と同系の要素と認識される。木の根A式段階にまで残存する、常世式の系統要素である。

東京都の③では新宿区下戸塚遺跡Ⅲ（徳沢2000）＜33＞（第10図4）、北区赤羽台遺跡（小林他1992）＜34＞（第10図1）、八王子市多摩ニュータウンNo426遺跡（佐藤1989）＜36＞（第10図9）、八王子市多摩ニュータウンNo194遺跡（川島2001）＜38＞（第10図10）等がある。第10図1は口縁部の絡条体圧痕文帶下に、2本対の細隆起線を等間隔で垂下するのみの構成である。また、10は口縁部に短い集合沈線を施文するもの

で、胴部には段違いの斜行クランク文を施文する。他に、板橋区仲宿遺跡（加藤1991）＜35＞（第10図3）や赤羽台遺跡（第10図2）のように、口縁部を区画するのみのものもある。

また、多摩地域では法政大学多摩校地遺跡群C地点（新関1988）＜41＞（第10図5）や、町田市田中谷戸遺跡（川崎1976）＜8＞（第10図7、8）のように、清水柳E類土器と折衷したような土器が存在する。

茨城県では水海道市奥山C遺跡（小河1986）＜101＞（第10図11～14）、鉾田市安塚遺跡（第10図17）、鹿嶋市常陸伏見遺跡（第10図22）などで出土している。第10図11は7と同様に文様帯を重複する構成になるものと思われ、14は「π」字状に通じる要素を持つ。

栃木県では県南部の佐野市黒袴台遺跡（芹沢2001）＜104＞（第8図21、22）で出土しており、第8図21は口縁部に貝殻腹縁文を施文するもので、22は口唇部に貝殻腹縁文の刻みを施す。

神奈川県では茅ヶ崎市白久保遺跡（第8図18～20）、横須賀市小原第1遺跡＜66＞（佐藤1994）で出土しており、絡条体圧痕文ではなく、貝殻腹縁文を施文する。

＜④の特徴を持つ土器群＞

非常に薄手で、殆ど織維を含まない土器群は、基本的には東北地方と共に持つ特徴を持つもので、数量的には少なく、茨城県鉾田市安塚遺跡（第10図18、19）等に見られる。木の根遺跡などと合わせると、少数ではあるが東北系の土器群が組成するものと思われる。18、19はすでに細かな細隆起線区画を行っており、区画内に細隆起線を充填施文する構成が伺える。栃木県茂木町登谷遺跡（中村2002）＜105＞では、横位に配された細隆起線文に沿って、鋸歯状の沈線文が施文される土器が出土している。いわゆる子母口式直後の、東北地方との関係を伝えているものと思われる。

＜小結＞

木の根A式を出土する代表的な遺跡を第11図に示した。木の根A式で抽出された①～④の文様構成は、第11図の分布圏内においても地域的な特徴を持ちつつ分布する様相が窺えた。先ず、①は千葉県北部から茨城県にかけて分布する傾向があり、②は比較的広い分布圏を持ち、茨城県から千葉県、東京都の多摩地方にかけて分布し、神奈川県や静岡県では清水柳E類土器との折衷的な様相を持つようになる。③は大きく縦横構成のチーフと区画文構成のモチーフに分れ、縦横構成のチーフは千葉県北部から埼玉県東部地域に集中する傾向があり、区画文を構成するものは奥東京湾の内湾に面した地域に分布する傾向が窺われる。特に、幾何学的な区画や半円状のモチーフ、多帯の文様構成は東京湾を隔てた湘南から駿豆の地域

との交流関係が窺える。埼玉県の中央部から西部地域は、木の根A式系の土器群が少ない地域であることが理解されるが、縞条体压痕文の付つかない細隆起線文土器が分布していることや、分析しきれていない沈線文土器が存在することも予想される。

また、縞条体压痕文は茨城県、千葉県、埼玉県方面の関東東部地域に多く、貝殻腹縁文は東京都多摩地区、神奈川県方面の関東西部地域で多く施文される傾向にある。特に神奈川県における幅狭な口縁部文様を持つ木の根A式系の土器群は、白久保遺跡例のように貝殻復縁文を口縁部に施文するものが殆どであり、縞条体压痕文を施文する清水柳E類土器と対峙する関係にあるかのような様相を示している。

4 清水柳E類土器について

清水柳E類土器は各氏によって検討されてきたが、位置付けにおいて子母口式並行とするか、野島式並行とするか意見の分かれどころであった。それは、最大の型式学的特徴が縞条体压痕文にあることから導き出されたもので、文様構成等の比較検討が十分に成なされて来なかった点にもその要因があるものと思われる。しかし、2009年10月、資料の増加に伴い静岡県考古学会により開催された「清水柳E類土器を考える」と題したミニシンポジウムでは、下島健弘氏が資料の集成、分類を、笛原千賀子氏が壇かな出土状況の検討から共伴関係の検討を行い、精力的に清水柳E類土器の分析と位置付けを行っている。

ここではそれらの成果に基づき、清水柳E類土器の分類を行い、型式学的な検討から木の根A式や野島式との関係性を探ることとする。

清水柳E類土器は横位線状の縞条体压痕文を施文する土器群と、それに組成する細隆起線文土器や沈線文土器などの土器群とともに一つの類を成していると考えられており、いずれ1型式（清水

E式）に界華されるであろうことが指摘されている（下島2009）。また、清水柳E類に後続する野島式並行期の在地系沈線文土器（木戸上式）についても、清水柳E類土器段階との相違が的確に把握されている。

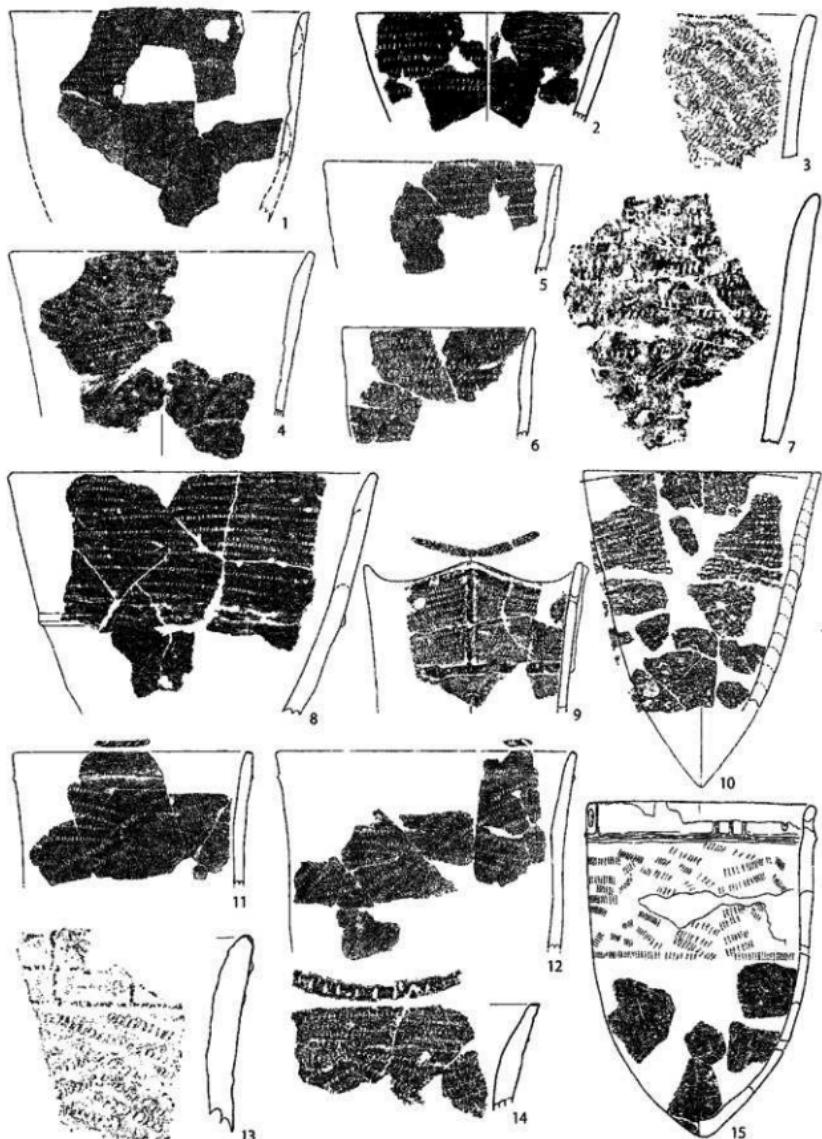
＜線状の縞条体压痕文を施文する土器群＞

下島氏は縞条体压痕文土器について文様要素の相違でⅠ～Ⅳ類に分類しているが、ここでは縞条体压痕文土器をA群とし、文様帶構成等の相違から土器群をⅠ～Ⅳ類に分類した。

A群第Ⅰ類

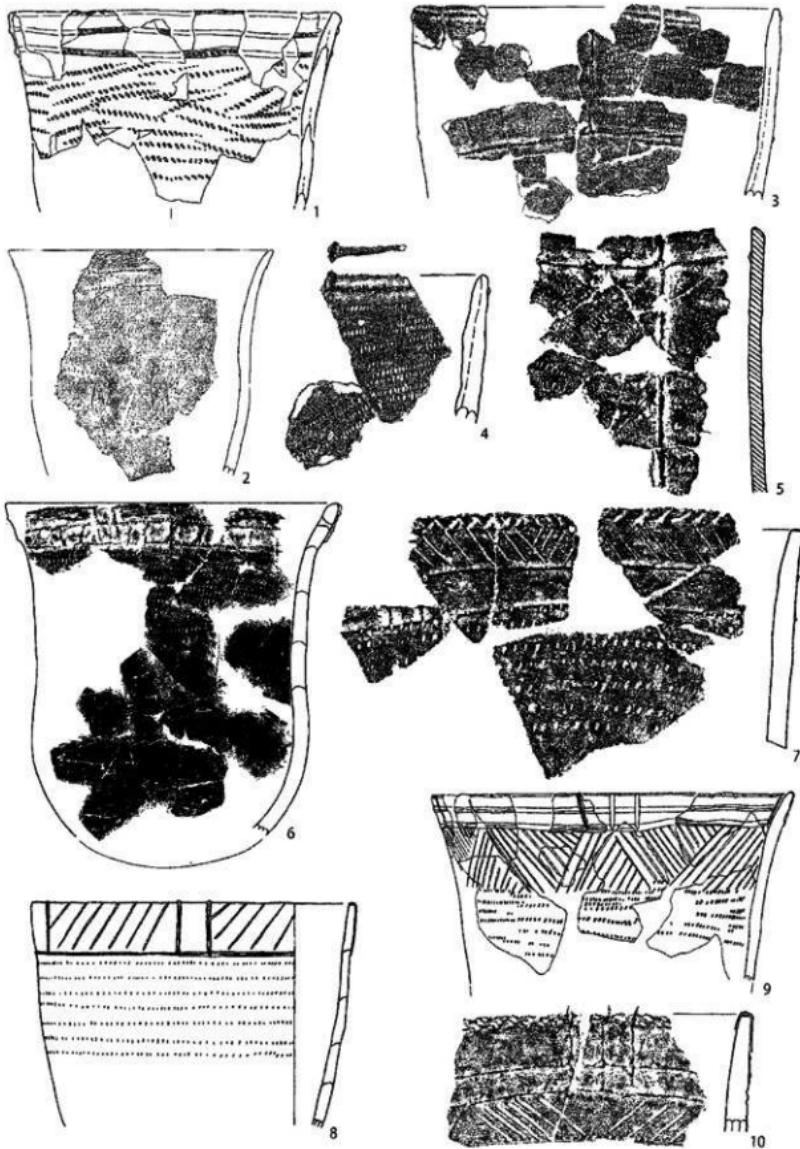
胴上部に横位を基調とした縞条体压痕文を一定幅に施文し、文様帶を構成するもの。Ⅰ帶構成の土器群であり、a) 文様帶の末端を開放するものと（第12図1～7）と、b) 隆帶で区画するもの（第12図8～10）がある。

縞条体压痕文を横位に施文し、下端を開放するものは静岡県長泉町梅ノ木沢遺跡I（笛原2008）<89>（第12図1、5）、同熱海市大越遺跡（山村1995）<95>（第12図2）、同三島市小池遺跡（笛



第12図 清水柳E類土器(1)

1・5:梅ノ木沢1、2:大越、3杉久保蓮谷、4:玉川金山、6・11・12:小池、7:山ノ神、8:徳倉B、9:恩名沖原、
10:多摩No.810、13:上川、14:多摩No.351、15:駒形



第13図 清水柳E類土器(2)

1: 笹見原、2: 上川、3・4: 梅ノ木沢1、5: 笹ヶ庭、6: 大越、7: 清水柳、8: 清水柳北、9: 多摩N192、10: 玉川金山

原1998) <第12図6>等で出土している。また、絡条体圧痕文を菱形状や鋸歯状に施文するものは、同御殿場市山ノ神遺跡(小野1975) <94> (第12図7)、山梨県都留市玉川金山遺跡(網倉2009) <81> (第12図4)、神奈川県杉久保蓮谷遺跡(海老名市1998) <67> (第12図3) 等で出土している。

隆帯で文様帶下端を区画するものは静岡県三島市徳倉B遺跡(仲家1998) <85> (第12図8)、東京都八王子市多摩ニュータウンNo810遺跡(江里口1996) <43> (第12図10) 等で出土しており、神奈川県厚木市恩名沖原遺跡(迫2000) <68> (第12図9) では波頂部から胴部区画隆帯まで垂下する隆帯で文様帶を分割する土器が出土している。

A群第II類

口縁部に1~2本の細隆起線を巡らして区画し、胴部に絡条体圧痕文を施文するもの。a) 胴部文様帶の下端を開放するもの(第12図11、12、第13図1、2)と、b) 下端を区画するもの(第12図15、第13図3)がある。口縁部上から口縁部横位の細隆起線まで、縦位の細隆起線を2~3本単位で垂下し区画するものが多い。

口縁部にやや間隔を空けて細隆起線1本を巡らし、胴部に菱形状の絡条体圧痕文を施文するものは三島市小池遺跡(第12図11、12)で出土している。下端部が不明であるものの菱形状の絡条体圧痕文を施文するものは東京都町田市多摩ニュータウンNo351遺跡(山本2004) <11> (第12図14)で出土している。胴部文様帶下端区画を絡条体圧痕文で施すものは神奈川県小田原市駒形遺跡(戸田1997) <69> (第12図15)で出土しており、幅広の柳子状絡条体圧痕文で菱形状文を施文する。口縁部に2本の細隆起線を配し、胴部に開放の菱形文を施文するものは静岡県裾野市上川遺跡(袴田1987) <88> (第12図13) や山梨県忍野村 笹見原遺跡(西本2003) <82> (第13図1) 例

があり、下端を開放する横位の絡条体圧痕文を施文するものが静岡県上川遺跡(第13図2)から出土している。口縁部に隆線を巡らせて区画し、口唇部上から2本単位の隆線をこの区画隆帯まで垂下させ、胴部に横位の開放する絡条体圧痕文を多段に施文する土器が、千葉県袖ヶ浦市上用瀬遺跡II(井上2000) <64> (第7図11)で出土している。清水柳E類土器が東京湾を渡って千葉県側に分布し、木の根A式との関係を示す大きな証左となる。

また、口唇部直下と胴部に細隆起線を巡らして文様帶を分帯し、口唇部上から胴部の細隆起線まで細隆起線を垂下して分割し、横位の絡条体圧痕文を施文する土器が静岡県梅ノ木沢遺跡I(第13図3、4)から出土している。静岡県笹ヶ窪遺跡(芹沢・加藤1937) (第13図5) では、同種の細隆起線を垂下した区画内に、菱形状の絡条体圧痕文を施文する。

A群第III類

文様帶を重疊する土器群で、文様要素に沈線文が加わるもの。a) 口縁部に2本細隆起線を配して区画し、口縁部と胴部を合わせて多段の文様帶構成を探るもの(第13図6、7、9、10)と、b) 口縁部を1本の細隆起線で区画し、胴部を多段に区画するもの(第13図8、第14図1~4)に大きく分けられる。口唇部上から下段の細隆起線まで貫く縦位の細隆起線を、1~3本単位で垂下するものが多い。

静岡県大越遺跡(第13図6) 例は、口縁部の幅狭の2帯目に細隆起線を縦位施文して梯子状の区画文を施すもので、同沼津市清水柳遺跡(瀬川1976) <86> (第13図7) 例は1段目の口縁部区画に集合鋸歯状沈線文を施文するものである。東京都町田市多摩ニュータウンNo192遺跡(小菜2004) <38> (第13図9) 例は口縁部に加飾が無く、袴見原遺跡第13図1と類似するが、胴部の文様帶構成が異なる。9は口縁部区画下に集合沈線



第14図 清水柳E類土器(3)

1・10:白久保、2:柏上原、3:宮の前、4・13:大越、5・6:玉川金山、7:梅ノ木沢1、8・11:入ノ洞B、9・12:杉久保連谷

鋸歯状文帯を設け、以下に横位の絡条体圧痕文帯を構成する。山梨県玉川金山遺跡（第13図10）例も、同様な構成になるものと思われる。

静岡県沼津市清水柳北遺跡（関野1989）<87>（第13図8）は口縁部の細隆起線区画内に集合沈線を充填して文様帯化し、胴部に開放の横位絡条体圧痕文を施す。神奈川県茅ヶ崎市白久保遺跡（松田1999）<15>（第14図1）例は胴部を沈線で区画し、横位の絡条体圧痕文を施すもので、第13図8とは文様帯を設定する位置に対する意識が異なる。

熱海市大越遺跡（第14図4）、山梨県西桂町宮の前遺跡（吉岡2003）<80>（第14図3）、神奈川県伊勢原市柏上原遺跡（林原1999）<72>（第14図2）例は細隆起線の口縁部区画内に沈線文を施し、その下部に絡条体圧痕文帯を設け、さらに以下に沈線区画の文様帯を設ける構成となっている。沈線区画内に、2は斜行の集合沈線文、3は地文の絡条体圧痕文上に沈線の梯子状文、4は沈線の半円文と集合鋸歯状文が組み合わさったモチーフを描いている。第13図9、10とは沈線文帯を設定する位置が異なる。

A群第IV類

口縁部に文様帯を構成し、沈線や細隆起線のモチーフを描くもので、胴部に地文状の横位絡条体圧痕文を施すものである。a）沈線文等で口縁部に幅広の文様帯を構成するもの（第14図6、7、8、10）と、b）段帶部等で口縁部に幅狭な文様帯を構成するもの（第14図5、11、12）がある。

山梨県玉川金山遺跡（第14図6）例はやや幅広な口縁部文様帯に、単沈線で斜めの梯子状文を施すもので、胴部に地文状の横位絡条体圧痕文を施す。神奈川県白久保遺跡（第14図10）例は幅広な口縁部文様帯を段帶状に作出し、細隆起線のみで縦位の区画を施して、横位の梯子状文を構成するもので、胴部に横位の絡条体圧痕文を施

する。両者は文様要素や器形こそ異なるが、文様帯構成やモチーフ構成が酷似する。

また、静岡県梅ノ木沢遺跡I（第14図7）例は平行沈線の縦位及び細区画内に絡条体圧痕文を充填施すもので、同裾野市入ノ洞B遺跡（藁科2008）<91>（第14図8）例は、沈線の幾何学的な区画内に絡条体圧痕文と沈線を充填施すものである。

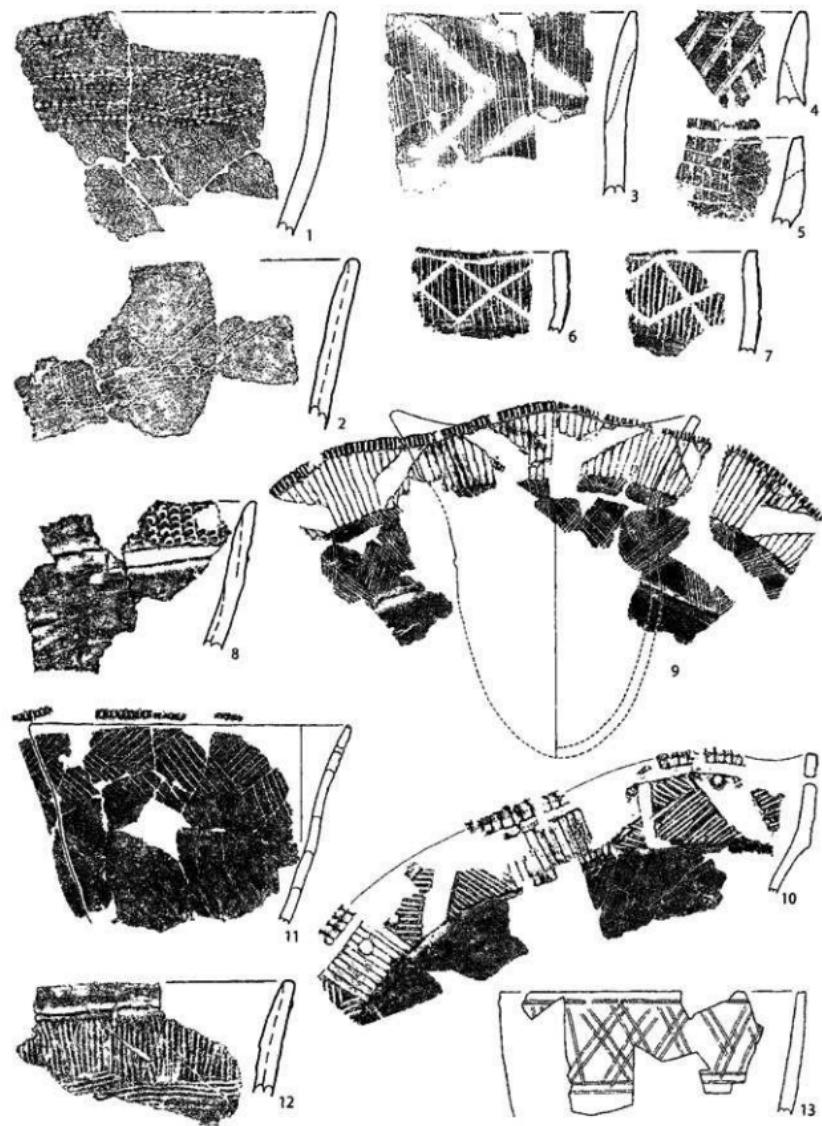
段帶状の幅狭文様帯を構成するものでは、静岡県入ノ洞B遺跡（第14図11）例は細隆起線の区画充填文や梯子状文を施すもので、段帶部下に絡条体圧痕文を施す。第14図8と同一個体になる可能性もある。神奈川県杉久保蓮谷遺跡（第14図12）例は、半截竹管状工具で縦位と斜行沈線を組み合わせた文様を描く。伴出の杉久保遺跡（第14図9）例は、段帶部で口縁部文様帯を区画するが、縦位の細隆起線を垂下するのみの構成となっている。いずれも胴部に絡条体圧痕文を施す。山梨県玉川金山遺跡（第14図5）例は、段帶部等を設けないが、やや幅の狭い口縁部文様帯に集合鋸歯状沈線文を施す。この幅狭口縁部には、格子目文や梯子状文、集合構成文等を沈線施す、口縁部文様帯を細隆起線や沈線で区画するものが多い。口縁部の区画下に絡条体圧痕文を施さないものは、B群第II類、第III類a種もしくはb種に分類される可能性がある。

<絡条体圧痕文を持たない土器群>

絡条体圧痕文土器群に組成すると思われる土器群については、先の下島氏や笛原氏の検討から明らかになりつつある。これらの土器群をB群と分類するが、大きく沈線文を施す上器群と細隆起線文を施す土器群に分けられる。B群第III類土器については一括して取り扱ったが、さらに他系統性を重視して系統別に整理する必要がある。

B群第I類

田中聰氏が指摘した「地文縦位沈線文土器」（田中1997、1999）を一括する。口縁部の文様帯に縦



第15図 清水脚E類土器(4)

1・3~5:小池、2・12:梅ノ木沢I 2住、6・7・9・10:徳倉B、8・11:梅ノ木沢I、11:老平



第16図 清水柳E類土器(5)

1・2：山ノ神、3～5：玉川金山、6～9：忍名沖原、10～14：御屋敷添、15：柏上原

位の密接する沈線文を施し、その上から沈線のモチーフを描くものである。静岡県小池遺跡（第15図3）例は地文縦位沈線文上に幅広の凹線で重層の菱形文を描き、同徳倉B遺跡（第15図6、7）例も地文縦位沈線文上に、横位連結の菱形文を施文する。この菱形文は、鋸歯状文を追い込み状に施文して描くものと思われるが、菱形状を構成していることが重要である。それは、絡条体圧痕文の菱形状施文と関係するからである。また、静岡県梅ノ木沢I遺跡（第15図12）例のように、口縁部を細隆起線で区画するが、基本的には地文縦位沈線文土器の構成を探るものもある。

B群第II類

沈線文土器を一括する。先割れ状工具による幅広な沈線や、ヘラ切り状のシャープな沈線で集合構成文を中心とした文様を描くものである。小池遺跡（第15図1）や梅ノ木沢I遺跡（第15図2）例は、沈線文の口縁部文様帶を構成するもので、1は口縁部の文様帶に横位結節沈線を施し、一部角度を変えた斜行線を組み合わせて、交差部分に菱形状の区画文を構成する。文様帶の上下区画は行わない。2は口縁部に縦位区画線を垂下し、並行する5条の斜行沈線に横位の沈線を組み合わせて菱形区画文を構成する。1と類似する手法で、横位と斜位の沈線を組み合わせ、斜行クランク区切り文状の構成を探る手法は、木の根A式の細隆起線文の文様描出手法と同一であり、両者の並行関係を類推する重要な要素となる。

また、静岡県小池遺跡（第12図4、5）例は段帶状の口縁部に集合鋸歯状文や格子目文を描くものである。静岡県裾野市老平遺跡（阿部2008）（第12図11）例はヘラ切り状の沈線で集合鋸歯状文を構成するが、絡条体圧痕文土器は出土していない。さらに、静岡県梅ノ木道跡I（第15図13）例は口縁部を細隆起線で区画し、文様帶下端を平行沈線で分帶、分割し、さらに平行沈線の格子目文等を区画内に充填施文するものである。

B群第III類

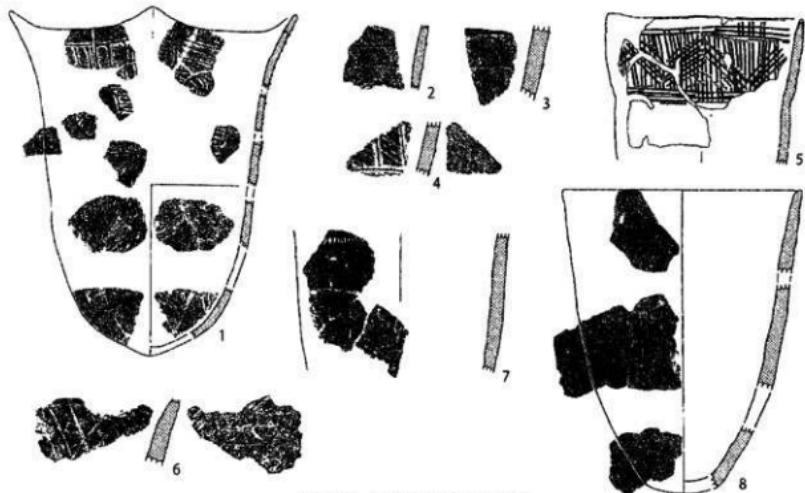
細隆起線文を主体とする土器群を一括する。
a) 細隆起線と沈線文が複合施文されるもの（第15図8～10）と、b) 細隆起線文のみのもの（第16図1～11、14、15）がある。

静岡県梅ノ木沢遺跡I（第15図8）例は、口縁部を1～2本の細隆起線で区画し、口縁部に縦位の半截竹管状刺突文列を施文する。口縁部の区画細隆起線は、欠損のため不明な部分もあるが、口唇部から垂下され、一部口縁部区画の細隆起線を貫通してクランク区切文状に折れ曲がり、2本並行して施文されているものと思われる。木の根A式に共通する特徴的な手法である。

同徳倉B遺跡（第15図9、10）例は、笛原氏によって第12図8の絡条体圧痕文土器との共伴関係が検討された土器群で、9は段帶状の口縁部に細隆起線のみの文様を構成し、胴部に集合沈線による鋸歯状文を施文する2文様帶構成である。2帶目の下端区画にはやや太い隆帯状の隆起線が使用されており、第12図8の絡条体圧痕文土器の胴部区画隆帯と共に通する。10も口縁部が段帶状を呈し、細隆起線と沈線文の複合するモチーフを描いている。野島式との区分が難しい土器である。

9、10とも口縁部の文様は、細隆起線間の無文帶で鋸歯状文を構成するもので、9は口縁部に等間隔の細隆起線を密に縦位施文し、波頂部下には数本の細隆起線を垂下して区画要素としている。波底部分は細隆起線の無文帶を鋸歯状に配して区画するもので、区画内充填文には地文状に施文する縦位の集合細隆起線を施文している。胴部の文様は集合沈線の施文幅で、重複させながら鋸歯状文を描くものであり、口縁部と類似するモチーフを構成している。10もほぼ同様な手法で文様を描くが、細隆起線無文帶による区画がやや帯状に近い区画となり、区画内に異方向の集合沈線を充填施文する構成である。野島式の手法である。

第16図1～9は、絡条体圧痕文土器と共伴する



第17図 清水柳E類土器(6)

1~8:白久保SJ1

と考えられる細隆起線文土器群である。静岡県山ノ神遺跡(第16図1、2)例は、細隆起線無文帯で上下対向弧線文を描き、区画内には3本単位の細隆起線をやや間隔を空けて充填施文する。また、細隆起線の無文帯による区画の端部がクランク状に入り組んでおり、細隆起線無文帯内に斜行の梯子状文を構成する部分も現れる。口縁部を欠損し不明な部分があるが、木の根A式の千葉県泉北側第2遺跡の第7図9と類似した文様構成である。絡条体圧痕文がなく、この破片からは野島式の古段階への位置付けが考えられる。

山梨県玉川金山遺跡(第16図3)例は、波状口縁を呈し、細隆起線を巡らせて口縁部を区画するもので、波頂部下に3本単位の細隆起線を垂下する。同遺跡出土の4、5は野島式と分類された細隆起線文土器で、4は細隆起線上に小さな押圧状の加飾を施している。5は口縁部に斜位の集合細隆起線を施文する。

神奈川県恩名沖原遺跡(第16図6~9)例は、口縁部と胴部に3本単位の細隆起線を巡らせ(6

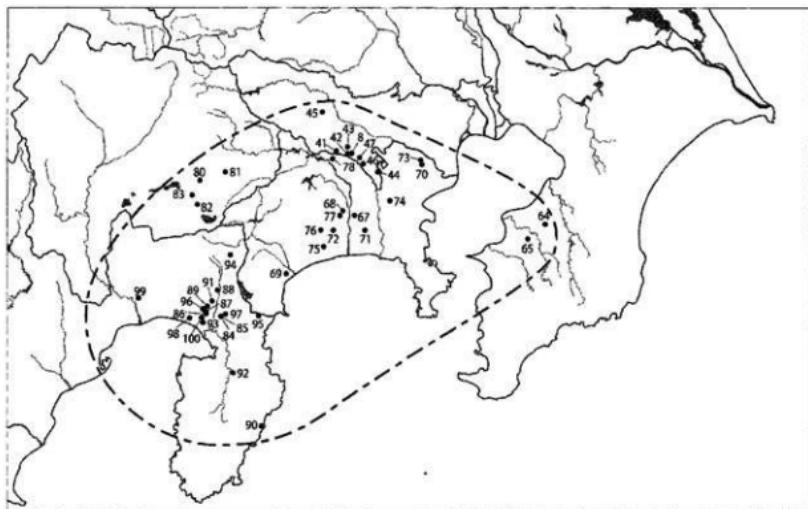
~8)、口縁部からクランク区切り文状に細隆起線を垂下させ区画する(6、8)。また、粗い区画文を持つ沈線文土器(9)も出土しており、斜行クランク区切文状の充填沈線を施文する。これ等の土器群は木の根A式に分類され、第12図9の絡条体圧痕文土器と共に出土している。

また、神奈川県厚木市御屋敷添遺跡第3地点(天野1998)<77>(第16図10~14)では、多帶の文様帯を持つ細隆起線文土器(10)、清水柳E類の絡条体圧痕文土器と同様な文様構成を持つ土器(11)、沈線文土器(12、13)、少量の野島式土器(14)が出土している。

神奈川県伊勢原市柏上原遺跡(第16図15)では、梯子状の細隆起線文で文様帯を区画する野島式土器が、第14図2の絡条体圧痕文土器と共に出土している。

<小結>

清水柳E類土器を出土する代表的な遺跡を、第18図に示した。小堀氏の指摘(小堀2004)のように、清水柳E類を出土する遺跡は境川流域を中心



第18図 清水柳E類土器出土遺跡分布図

とした多摩川以南にあり、今のところ多摩川を越えることはないようである。しかし、東京湾を渡った千葉県袖ヶ浦市用瀬II遺跡や、同木更津市台木A遺跡では清水柳E類土器の出土が確認されており、奥東京湾沿岸ではなく、多摩川以南の東京湾を挟んだ地域で交流のあったことが明らかとなってきた。

清水柳E類土器の絡条体压痕文を施す土器A群はその特徴から識別が容易であるが、B群とした土器群では第I類である地文縦位沈線文土器以外の第II類から第III類土器は、木の根A式や野島式の細隆起線文土器、沈線文土器等との識別が難しい。A群に伴うと思われる土器群は、地域によって少しずつ様相を変えている。多摩地域や相模川流域の遺跡では、木の根A式や野島式と認定される細隆起線文土器群が出土している。

その典型的な例は、神奈川県臼久保遺跡第1号住居跡（第17図1～8）から一括出土している。1～4は細隆起線文土器、5は地文縦位沈線文土器、7は清水柳E類の絡条体压痕文土器である。

1の細隆起線文土器は口縁部に細隆起線を巡らせ無文帯を区画し、縦横の細隆起線を配して、部分的に曲線的なモチーフを区画し、細隆起線を充填施文する。2～4もやや間隔の空いた細隆起線を縦横に施文する。5は地文縦位沈線文土器で、段帶状の口縁部文様帶の縦位沈線上から数本の沈線で鋸歯状文を描き、貝殻腹縫文を沿わせている。7は横位の絡条体压痕文を施し、文様帶下端を開放する。木の根A式から野島式古段階にかけての良好な一括資料と判断され、相互の関係性を物語る好資料と言える。

一方、静岡県愛鷹山南東麓を中心とした地域では、木の根A式や野島式そのものの特徴を持つ土器群は殆ど出土せず、細隆起線を口縁部に巡らす木の根A式②の特徴を持つ土器群が分布している。そして、その中間地域で野島式土器そのものや、清水柳E類土器と木の根A式の文様が折衷化した、もしくはキメラ化した土器群が出土している。御殿場市山ノ神遺跡では野島式土器が、熱海市大越遺跡では多带化した文様帶の中に両地域のモチーフ

フを嵌め込んだキメラ土器が分布する。

従って、駿豆地方においても子母口式段階の土器群の後に横位絶条体圧痕文を施す細隆起線文土器が盛行する様相が明らかになってきた。清水柳E類土器は東日本的な土器群の大きな流れと変化に呼応して、特に木の根A式段階の細隆起線文

土器との要素交換を行いつつ、横位絶条体圧痕文という独特的な文様構成を確立し、在地系の沈線文系土器群と融合もしくは組成しながら、地域的な土器群として成立して来たことが明らかになつたものと思われる。

5 東北地方の絶条体圧痕文の付く細隆起線文土器

細隆起線文土器の分布は東北地方一帯に広く認められるが、絶条体圧痕文の付く細隆起線文土器は少なく、おおよそ福島県から山形県にかけての東北地方南部に分布する程度である。青森県や岩手県、宮城県などでは吹切沢式以降、絶条体圧痕文の付く細隆起線文土器は見当たらない。しかし、ムシリ式とされる沈線文土器では口縁部の隆帯に絶条体圧痕文を施すものがあり、あるいは細隆起線に絶条体圧痕文の付く土器が存在する可能性もある。東北南部の櫻木下層式に絶条体圧痕文が付く土器は、関東地方の木の根A式に類似した文様構成の土器であることが理解される。

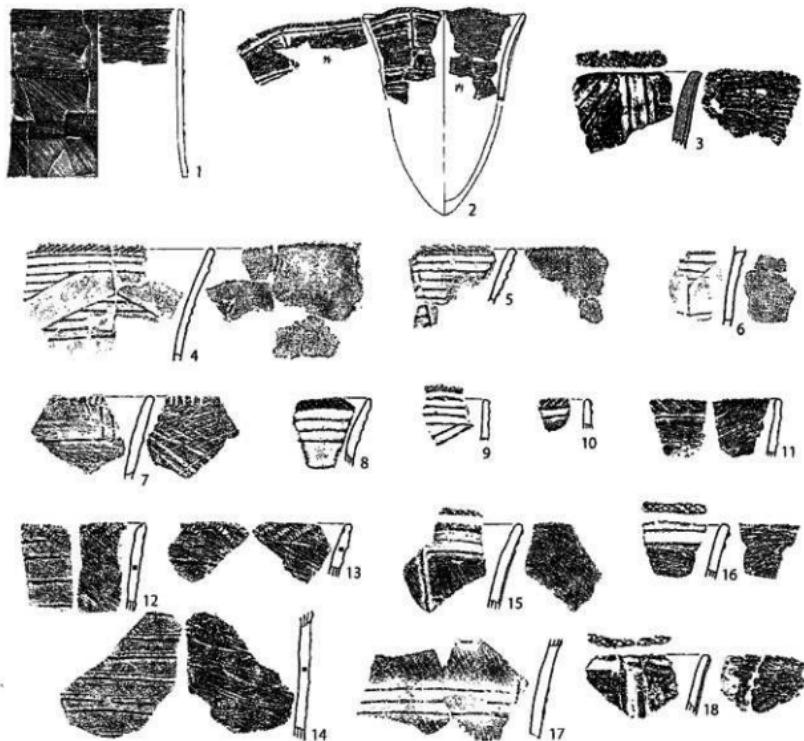
まず、青森県八戸市売場遺跡（三浦1985）（第19図1）例は、絶条体圧痕文は付かないか口縁と胴部に刻みを施す2本の細隆起線を巡らせて区画するもので、中段にも1本の細隆起線を巡らせる。破片復元のため全体構成は不明であるが、文様帶下端の区画細隆起線が段違いのクランク状区切文となり、上下に細隆起線がずれる構成を探る。これは、木の根A式に見られる特徴的な手法で、縦位に区画された左右の横位細隆起線が上下にずれる構成は、このクランク状区切文を成立の背景とするものと考えられる。福島県いわき市竹之内遺跡（馬目1982）（第19図2）例は、胸部文様帶の横位細隆起線に相互のずれが生じている。また、関東地方の細隆起線文土器のモチーフにも同様な傾向が窺われるは、この同一原理で理解できるものと思われる。

福島県原町重米坂A遺跡（吉田1990）例は、口

縁部に縦位と斜位の2～3本単位の細隆起線を垂下するもので、時期が判然としないが、子母口式もしくは北前式などに比定される可能性もある。

この時期の最も特徴的な土器群は、器壁が薄く、口縁部に2～3本の細隆起線を巡らし、口縁部から垂下する細隆起線で文様帶を分割するものと、口縁部に数条の細隆起線を横位施すものである。山形県南陽市月ノ木B遺跡（黒坂1989）（第19図4～7）例は、口縁部にやや間隔の狭い細隆起線を数条巡らし、2本対細隆起線を鋸歯状に施して区画内の細隆起線を取り外し、無文帶状を構成している点に特徴がある。これは、一見細隆起線無文帶で鋸歯状文を施し、区画外の余白部分に横位の細隆起線を充填施しているかのようであるが、実は、地文状の横位細隆起線文帶に無文帶の鋸歯状文を上書きしたものとして理解することも可能である。結果的にモチーフと充填文の関係は調和が取れているが、先の清水柳E類に伴うと推定された静岡県徳倉B遺跡第15図9の口縁部文様帶と同一の構成であることが理解される。徳倉B遺跡例は、口縁部に縦位の集合細隆起線を施し、そこに細隆起線無文帶の鋸歯状モチーフを上書きした構成となっている。

また、月ノ木B遺跡でもう一つ重要な点は、第19図7の口縁部に細隆起線を巡らせて区画し、2本対の細隆起線を口唇部直下から垂下する破片が存在することである。この口縁部の構成は、木の根A式、清水柳E類土器に共通する要素であり、それぞれの並行関係を紐解く重要な要素となる。



第19図 東北地方の縦条体圧痕文の付く細隆起線文土器

1: 庄場、2: 竹之内、3: 八重米板A、4~7: 月の木B、8: 上田郷、9: 唐松A、10: 前原A、11: 萩原、12~14: 西ノ向D、15~18: 中根館

さらに、口唇部裏面には短い刻みを施しており、常世式の要素を残存している点が重要であり、埼玉県井沼方遺跡第6区の第9図13と同様相あることは、述べるまでもないであろう。

口縁部に數本の細隆起線を巡らせ縦条体圧痕文等を施文するものは、福島県南相馬市萩原遺跡(鹿又2006)(第19図11)、同福島市西ノ向D遺跡(彌江2004)(第19図12~14)等で出土しており、11は口縁部文様帶内に斜行沈線を施文し、12、13は口縁部内外面に縦条体圧痕文を施文する。

口縁部と胴部に2~3本の細隆起線を巡らせ、

縦位の区画文を施すものは、福島県広野町上郷田IV遺跡(本間1999)(第19図8)、郡山市唐松A遺跡(西間木1983)(第19図9)、天栄村前原A遺跡(井1991)(第19図10)、同平田村中根館跡(大越2004)(第19図15~18)等で出土している。関東地方の千葉県十余三稲荷峰遺跡(第6図20)例、同城ノ台南遺跡(第7図3)例は、器壁が薄く、径も小さいことからこれ等の土器群と同系列のものと判断される。第19図15、17は上下区画の中間部で縦位区画付近に横位細隆起線の一部が残ることから、竹之内遺跡例(第19図2)に近い文様構

成になるものと思われる。

東北地方では、判然とはしないがこれらの土器群の後継として、幾何学的な細区画文を構成し、細隆起線を充填施文するタイプの楳木下層式土器が成立するものと思われる。従って、東北地方の

楳木下層式に比定される土器は、木の根A式段階と野島式の各段階に対応する細分が可能になるものと思われる。また、楳木下層式から鶴ヶ島台式までの変遷にも、不明瞭な部分を残している。

6 絡条体圧痕文の付く細隆起線文土器群の関係性について

<各土器群の分布の意味するもの>

絡条体圧痕文という文様要素に主眼を置きつつも、その要素のみではなく文様構造等を通して、野島式土器、木の根A式土器、清水柳E類土器のそれぞれの関係性について検討を行ってきた。

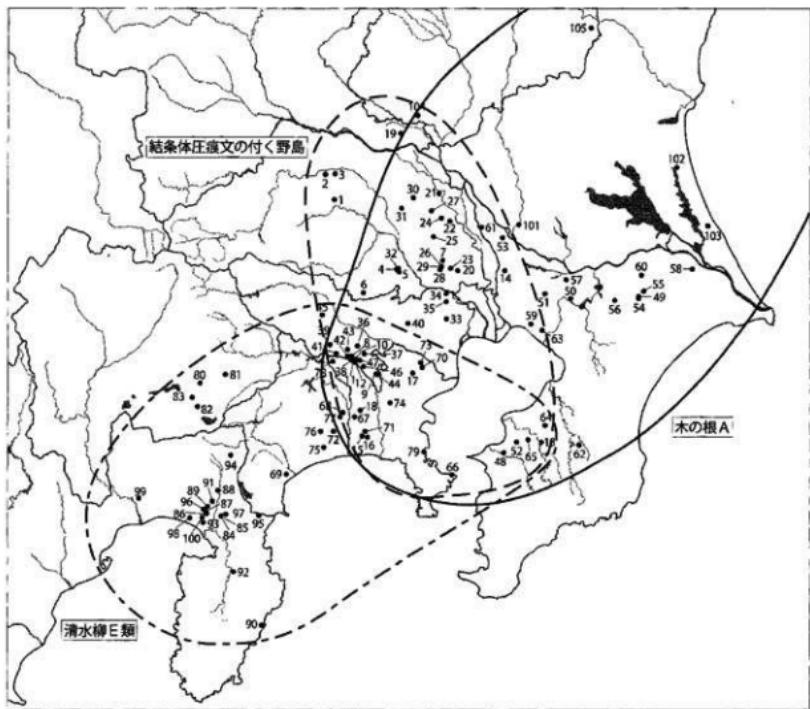
絡条体圧痕文の付く各土器群の分布範囲を、一枚にまとめたのが第20図である。木の根A式は関東東部から、埼玉県の東部、多摩地方、相模川流域にかけての地域で分布がみられ、清水柳E類は多摩川以南の地域から東京湾を隔てて千葉県の木更津地方にまで分布が確認された。両土器群の主体的な分布圏内に、それぞれ分布が重なることは、両土器群が並行関係にあり、相互に影響関係を持っていることの証となる。土器群の分布のみではなく、多帯文様帶内に相互の文様要素を嵌め込むキメラ土器が存在することも、両者を並行関係に置く大きな証左となっている。

関東地方では木の根A式の延長上にいわゆる野島式土器が成立するが、絡条体圧痕文の付く野島式土器は木の根A式土器と清水柳E類土器の分布が重複する埼玉県中・西部から、多摩地方と相模川流域にかけを結んだ地域に分布する。木の根A式の主体的な分布地域では、野島式の古段階にまで絡条体圧痕文の要素は継承されないようである。埼玉県旧大宮市上ノ宮遺跡（新屋1999）は野島式古段階の良好な遺跡であり、土器群は細隆起線文土器と沈線文土器に明瞭に分かれている。文様描出要素に沈線文を併施文する個体はあるものの、細隆起線の区画内に集合沈線を充填施文するタイプの狭義の野島式土器は出土していない。同様な

傾向は同じ地域の蓮田市さら遺跡（鈴木1983）でもみられる。木の根A式の絡条体圧痕文土器の分布圏内にあっても、上ノ宮遺跡やさら遺跡の古相を持つ細隆起線文土器には絡条体圧痕文は付いていない。同様な様相は、千葉県内の古段階に位置付けられる各遺跡にも見られる。

そして、絡条体圧痕文の付く野島式土器は、清水柳E類の分布圏でも一番外側の地域と、それに接した地域で、しかも木の根A式との狭間にある地域に分布している。しかも、絡条体圧痕文は野島式の中にあっても、結節沈線や器形の括れる2带文様帶構成の土器群が伴う段階まで残存することが状況的に推測された。

また、清水柳E類の絡条体圧痕文土器は木の根A式や、野島式との折衷的な文様構成を持つものがあり、組成すると思われる土器群の違いから時間的な幅が看取された。野島式と並行関係にある在地系の沈線文土器（木戸上式）の分析から、野島式のどの段階まで駿豆地方で絡条体圧痕文が残存するのか、言い換えれば清水柳E類土器が、野島式のどの段階まで並行関係にあるのかが明らかになるものと思われる。現在ではそれを証明するに足りうる良好な出土状況は得られていないが、奥東京湾沿いの旧浦和市内の明花向遺跡A区（金子1984）や同大谷口向原南遺跡2次（山田2001）では、野島式の中段階頃から、器面の条痕を磨消したり、断面U字状の太凹線で区画する土器群や太沈線文土器が出土している。その特徴から木戸上式との関係が想起されるが、時間的な位置付けについては流動的なところがある。駿豆地方で下



第20図 各土器群出土遺跡の分布図

島・笛原両氏の指摘(下島・笛原2009)のように、地文縦位沈線文土器とそれに伴う在地系沈線文土器の延長線上に木戸上式が位置付けられるのであれば、関東地方において野島式と木戸上式との並行関係を見極めることによって、清水柳E類土器の時間幅を割り出すことが可能になるものと思われる。

現在のところ、東京都田中谷戸遺跡、神奈川県白久保遺跡、柏上原遺跡、御屋敷添遺跡、静岡県山ノ神遺跡などの状況証拠から、少なくとも清水柳E類として分類した絡条体圧痕文土器A群第IV類の土器群は、野島式の古段階までに並行する可能性のあることが推測される。また、絡条体圧痕

文の付く野島式土器との関係からは、清水柳E類土器が野島式中段階頃までに並行する可能性が残されていることも指摘して置きたい。そして、野島式に見られる絡条体圧痕文は、野島式新段階まで継承される要素であることも明らかとなった。
<細隆起線文土器群の構造と変遷>

縄文時代早期後葉の細隆起線文土器の変遷については先の分析(金子1993)で見解を示しているが、ここでは木の根A式と清水柳E類の型式内容を分析し、両土器群の成立過程や、野島式の成立過程について私見を述べてみたい。

木の根A式の成立については、口縁部文様帶を区画する細隆起線の要素について注目している。

文様帶区画線の圧縮に系譜を認めるが、同様な動きの中で千葉県千葉市千葉井平遺跡（峰谷1998）出土土器の口縁部に鉢巻状に巡らす隆線文にも一つの系譜を求めて置きたい。この隆線の系譜と子母口式の段帶状の幅狭口縁部文様帶の要素が変遷融合して、木の根A式②③の特徴が成立するものと推測される。この口縁部文様帶を保持しつつ、胴部に横位の線状格条体を施文するものが清水柳E類土器である。

清水柳E類土器の格条体压痕文の要素は駿豆地方の子母口式からの系統でも捉えられるが、横位多段の線状格条体压痕文の構成は、木の根A式との関係の中で理解することができる。千葉県市原市新井花和田遺跡出土土器（第8図1～15）の中には、細隆起線文土器（1～6）や沈線文土器（7～10）と共に、各種の角頭状工具による連続押引刺突文や絹条体压痕文を横位多段に施文する土器（11～15）がある。これらは従来子母口式の要素として認識される場合が多く、単体で出土すれば型式的帰属としては子母口式と認定されよう。しかし、改めてこれ等の土器群を観察すると、子母口貝塚の子母口式と比較して施文域が広く、文様帶化している特長が看取される。逆に、第8図14、15のような格条体压痕文土器と清水柳E類との違いを指摘するのは難しい。新井花和田遺跡内でこれ等の土器群は木の根A式の細隆起線文土器との共伴関係が明確にされていないが、清水柳E類土器の成立には欠かせない土器群であると判断される。

同じような様相を持ち、新井花和田遺跡よりやや古い段階の遺跡が、千葉県成田市椎ノ木遺跡（高橋1987）であると思われる。椎ノ木遺跡は子母口式の新しい段階から木の根A式にかけての土器群が出土しており、第7図4～8は木の根A式段階の土器群と思われる。他に、子母口式の新しい段階の格条体压痕文土器や、刺突文土器が出土している。これ等の土器群の次の段階として新井

花和田遺跡の多段押引刺突文列土器が位置付けられるとすれば、木の根A式の主体的な分布地域内における多段横位刺突文列土器の変遷を明らかにすることができるよう。

清水柳E類土器は木の根A式の要素と、子母口式に系譜が辿れる多段の横位連続押引刺突文列土器の要素が融合して、湘南から駿豆にかけての地域で成立した土器群と判断される。清水柳E類の沈線文様に見られる梯子状文や粗い区画文内充填文手法は、すでに新井花和田遺跡066号住居跡や、グリッド出土土器に存在しており、両地域の土器群の並行関係を明らかにする上で重要な要素と判断される。

では、これ等の土器群と細隆起線区画内集合沈線充填施文タイプの野島式土器との関係はどうのように理解されるのであろうか。

野島式に特有の幾何学的な区画文と称される三角区画文等はすでに木の根A式で成立しており、井上氏の指摘（井上2010）のように区画文内充填文手法も成立している。この点からも野島式の初現期と認識されるのであるが、細隆起線区画内に沈線を充填施文するものが一般的となるのは次の段階以降からであろう。

先に、東北地方の格条体压痕文の付く細隆起線文土器群の説明部分で、山形県月ノ木B遺跡（第19図4）例と静岡県徳倉B遺跡（第15図9）例の文様について分析したが、横位や縱位構成の地文上に2本対になる細隆起線で鋸歯状のモチーフを描き、細隆起線間を無文帯とすることによって、区画と充填文の関係が出来上がる。この構成を沈線で表現すると、千葉県椎ノ木遺跡（第7図7）例となろう。

また、駿豆地方の地文縱位沈線文土器の縱位沈線文上から細隆起線の無文帯でモチーフを描くことによって、野島式の細隆起線区画内集合沈線充填文の構成と手法が成立することが予想される。しかし、この組み合わせ手法は、木の根A式段階

ではまだ確立していない。その状況を表しているのが神奈川県白久保遺跡第1号住居跡出土の土器群（第17図1～8）である。第17図5は地文縦位沈線文土器に集合鋸歯状沈線文を施しているが、まだ、並行細隆起線無文帯とは組み合っていない。この一括土器群が木の根A式段階か野島式古段階かは明らかにし得ないが、この段階では細隆起線区画内に集合沈線文を充填施文する土器は成立していないものと判断される。これは、先にも触れた埼玉県上ノ宮遺跡でも同様であることからも明らかである。

そして、細隆起線区画内に集合沈線を充填施文する野島式土器が、清水柳E類分布圏と木の根A式分布圏の両要素を継承して成立し、なおかつ、

清水柳E類土器の分布圏を取り巻く隣接地域で縦条体圧痕文の残存する野島式土器が存在する状況を考慮すると、駿豆地方の地文縦位沈線文土器等の沈線文要素の系統と細隆起線文の系統が融合し、野島貝塚出土土器（赤星1948）に代表される細隆起線区画内に集合沈線を充填施文するタイプの野島式土器が成立してきた可能性が高いものと判断される。

また、文様構成の一つである集合鋸歯状文は、その構成の出自を判ノ木山西式に系譜する沈線文土器に求めることができ、細隆起線や沈線で表現される野島式土器の重要な文様構成となっている。これ等の文様構成が組み合って、野島式の文様を構成しているものと思われる。

7 収束

粗い筋書きではあるが以上のように全国的に土器群を整理して、その系統性と画期を把握すると、野島式土器、特に細隆起線区画内に集合沈線を充填施文するタイプの土器群の成立過程が見えてくる。かつて田戸上層式の沈線文の系統から野島式土器が成立すると解釈された点についても、およその答えが出せたものと考えている。

野島式土器は様々な系統要素が割合されて成立しており、野島式をどのように規定するかによって型式の範囲は異なるものとなる。少なくとも縦条体圧痕文の終焉を以って画することや、細隆起線区画内に集合沈線を充填施文する土器群の成立を以って画するのも、実態の把握にとっては不十分であることが明らかになったものと思われる。また、広域編年で子母口式並行期の土器群を検討した場合、ここで検討してきた細隆起線文七器群はそれらの土器群と与しないものであることが理解されるであろう。野島貝塚を標識として野島式

を規定した場合、それより古相をもつ木の根A式段階の土器群を野島式の範疇で捉えるか、範疇外で捉えるかは見解の分かれるところである。筆者は現在のところ範疇内として捉えているが、範疇外とした場合においても、仮称木の根A式段階の土器群は型式としての要素を十分に兼ね備えており、子母口式の新段階としてではなく、子母口式と野島式の中間型式として独立する可能性が十分あると考えている。野島式の細分については細かく触れることが出来なかったが、別稿において補いたい。今後、野島式の細分と共に、各地の土器群との関係性を検討する予定である。

＜謝辞＞

本稿を草するにあたり、資料の実見やシンポジウムに際して、戸田哲也、池谷信之、笠原千賀子、阿部敬、下島健弘、毒島正明、村松篤、その他多くの方々にお世話をなった、記して御礼申し上げたい。

参考文献

- 青木 司 1986 「築田寺南遺跡」 築田寺南遺跡調査会
青木秀雄 1979 「高輪寺遺跡」 久喜市埋蔵文化財調査報告書
赤星直忠 1948 「神奈川県野島貝塚」『考古学集刊』第1冊 東京考古学会
愛鷹繩文遺跡研究グループ 1976 「沼津市木戸上遺跡の調査」『考古学ジャーナル』119
安孫子昭二 1982 「子母口式土器の再検討－清水柳遺跡第二群土器の検討を中心として－」『東京考古』第1号 東京考古談話会
阿部 敏 2008 「若平遺跡」 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第192集
阿部芳郎 1990 「古屋敷遺跡発掘調査報告書」 富士吉田市史資料叢書8
阿部芳郎 1997 「判ノ木山西遺跡出土土器の分類と編年」『シンポジウム 押型文と沈線文 本編』 長野県考古学会縄文時代（早期）部会
天野賢一 1998 「御屋敷添遺跡」 かながわ考古学財団調査報告33
網倉邦生 2009 「玉川金山遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第261集
荒井幹夫他 1979 「御庵遺跡第1地点」 富士見市文化財調査報告第17集
新屋雅明 1999 「上ノ宮遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第252集
井 憲治他 1991 「前原A遺跡・前原B遺跡」 福島県文化財調査報告書第249集
飯塚博和 1982 「勢至久保遺跡」 野田市遺跡調査会報告第1冊
市川正史他 1992 「向原遺跡II」 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告25
井上 賢 1997 「野島式土器二細分論」「人間・遺跡・遺物3 麻生優先生退官記念論文集」 発掘者談話会
井上 賢 2000 「上用瀬遺跡II」 君津都市文化財センター発掘調査報告書第165集
井上 賢 2006 「富士山麓における野島式期縄文土器の様相」『千葉大学人文社会科学研究』第13号
井上 賢 2010 「野島I式の成り立ち－区画文充填手法の確立」『土器型式論の実践的研究』 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第128集
伊林修一 1996 「焼場遺跡B地点・五百石遺跡」 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第73集
植木弘・金子直行 1980 「埼玉県比企郡嵐山町金平遺跡発掘調査報告書」 嵐山町教育委員会
海老名市 1998 「杉久保蓮谷遺跡」『海老名市史 I 資料編 原始・古代』 海老名市
江里口省三他 1996 「多摩ニュータウン遺跡No.810遺跡」 東京都埋蔵文化財センター調査報告第31集
遠藤圭一他 2010 「秋葉林遺跡II」 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第216集
大越道正他 2004 「仁井殿遺跡・中根館跡」 福島県文化財調査報告書第416集
小笠原永隆 2002 「千葉ニュータウン周辺における縄文時代早期中葉の土器資料－子母口式及びその前後形式を中心として－」『研究連絡誌』第63号 千葉県文化財センター
小倉 均 1981 「大北遺跡・井沼方遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書第15集
小倉 均 1986 「井沼方遺跡（第8次）発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書第59集
岡田光広 1994 「岩名第14遺跡」 千葉県文化財センター調査報告第249集
岡本東三他 1994 「城ノ台南貝塚発掘調査報告書」 千葉大学文学部考古学研究報告第1冊
岡屋英治 1988 「大袋II遺跡」『群馬県史 資料編I 原始古代I』 群馬県
小川和博 1997 「花咲新田台遺跡」 賀志野市教育委員会
小河邦男 1986 「奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡」 茨城県教育財團文化財調査報告第31集
小野真一他 1971 「沼津市荒区遺跡調査概要」『駿豆考古』第10号 駿豆考古学会
小野真一 1975 「ゆずり葉」 加藤学園考古学研究所
小野真一他 1976 「桜台一丁目郡修善寺町桜台遺跡発掘調査報告一」 修善寺町教育委員会
小野真一他 1980 「常陸伏見遺跡」 常陸伏見遺跡調査会

- 加藤秀之 1996 「御庵遺跡第20地点」 富士見市遺跡調査会調査報告第45集
- 金子直行 1984 「明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集
- 金子直行他 1985 「貝塚山遺跡第2地点」 富士見市遺跡調査会報告第24集
- 金子直行 1986 「猿貝北・新町口」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第61集
- 金子直行 1992 「子母口貝塚資料・大口坂貝塚資料 山内清男考古資料5」 奈良国立文化財研究所史料第35冊
- 金子直行 1993 「子母口式新段階「木の根A式」土器の再検討—細陰起線文土器の出自と系譜を中心として—」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要第10号
- 金子直行 2000 「野島式土器の成立について—一条痕文系土器群成立期の型式学的な系統整理を中心として—」『土曜考古』第24号 土曜考古学研究会
- 金子直行 2004 「押型文系土器群と沈線文系土器群終末期の関係性—絶条体圧痕文土器の分析を通して画期を探る—」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要第19号
- 金子直行 2008 「小林八束2遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第356集
- 金子直行 2008 「早期条痕文系土器」『絶対縦縞文土器』 アム・プロモーション
- 加藤秀之 1991 「仲宿遺跡」 仲宿遺跡調査会
- 川崎義雄 1976 「田中谷」「遺跡」 田中谷戸遺跡調査会
- 川島雅人他 1982 「多摩ニュータウン遺跡No.457遺跡」(第3分冊) 東京都埋蔵文化財センター調査報告第2集
- 川島雅人他 1996 「多摩ニュータウン遺跡No.457遺跡」 東京都埋蔵文化財センター調査報告第35集
- 川島雅人 2001 「多摩ニュータウン遺跡No.194遺跡」 東京都埋蔵文化財センター調査報告第99集
- 栗田則久 2010 「流山市思牛堀ノ内遺跡」 千葉県教育振興財団調査報告第635集
- 黒坂雅人他 1989 「月ノ木B遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第135集
- 朝持直樹他 2007 「尾上第2遺跡発掘調査報告書」 沼津市文化財調査報告書第93集
- 小糸一夫 2004 「多摩ニュータウン遺跡No.192遺跡」 東京都埋蔵文化財センター調査報告第152集
- 高麗正他 2001 「井の頭遺跡群AII」 三鷹市埋蔵文化財調査報告第22集
- 小林重義他 1992 「赤羽台遺跡—先土器・繩文時代編—」 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会
- 鈴見佳容子 1999 「水深西・水深北遺跡第2次」 浦和市遺跡調査会報告書第256集
- 坂本彰他 2003 「西ノ谷貝塚」 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告33
- 迫 和幸 2000 「神奈川県厚木市恩名冲原遺跡発掘調査報告書」 恩名冲原遺跡発掘調査会
- 迫 和幸 2006 「東京都町田市南大谷船荷山遺跡発掘調査報告書」 南大谷船荷山遺跡調査会
- 佐々木克典 1982 「神谷原遺跡II」 神谷原II八王子市門田遺跡調査会
- 笛原芳郎 1994 「焼場遺跡A地点」 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第55集
- 笛原千賀子 1998 「小池遺跡」 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第105集
- 笛原千賀子 2008 「梅ノ木沢遺跡I」 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第194集
- 笛原千賀子 2009 「ふたつの「野島」—長泉町梅ノ木沢遺跡の第II群土器—」 静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要第15号
- 笛原千賀子 2009 「清水柳E類土器の共伴関係と細分」『清水柳E類土器を考える』 静岡県考古学会東部例会ミニシンポジウム
- 佐藤明生 1994 「小原第1遺跡」 横須賀市埋蔵文化財調査報告書第2集
- 佐藤宏之他 1989 「多摩ニューエルフ426遺跡」 東京都埋蔵文化財センター調査報告第10集(第5分冊)
- 鹿又喜隆他 2006 「荻原遺跡(2次調査)」 福島県文化財調査報告書第433集
- 下島健弘 2003 「繩文時代早期清水柳E類の成立過程」「利根川」24・25
- 下島健弘 2009 「清水柳E類土器の共伴関係と細分」『清水柳E類土器を考える』 静岡県考古学会東部例会ミニシンポジウム

- 鈴木敏昭 1983 「ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集
- 鈴木敏昭 1984 「茶屋遺跡」 白岡町埋蔵文化財調査報告書第2集
- 瀬川裕市郎 1976 「清水柳遺跡の土器と石器」 沼津市歴史民俗資料館紀要)
- 関野哲夫他 1989 「清水柳北遺跡」 沼津市文化財調査報告書第47集
- 芹沢清八 2001 「黒持台遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告書第261集
- 芹沢長介・加藤明秀 1937 「伊豆・駿河の古式繩紋土器とその伴出石器」 考古学論叢第5輯 東京考古学会
- 高橋博文 1991 「泉北側第2遺跡」 千葉県文化財センター調査報告第190集
- 高橋徳多果他 2010 「下高原遺跡」 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第229集
- 高橋 誠 1987 「椎ノ木遺跡」 印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第15集
- 高橋 満他 1995 「市兵衛谷遺跡・新道遺跡」 綾瀬市埋蔵文化財調査報告4
- 田中 総 1997 「中部・東海地方における沈線文土器の様相」『シンボジウム 押型文と沈線文 本編』 長野県考古学会繩文時代(早期)部会
- 田中 総 1999 「中部地方における繩文早期沈線文土器群の終末について—関東以西における早期前半から後半への移行期の問題—」 長野県考古学会誌87・88
- 谷口康浩他 1984 「東京都町田市小山田遺跡群IV(No.15)」 小山田遺跡調査会
- 田村 隆 1982 「復山谷遺跡」 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VII 千葉県文化財センター
- 徳澤啓一 2003 「下戸塚遺跡III」 新宿区生涯学習財団
- 戸田哲也 1990 「成瀬西遺跡発掘調査報告書」 成瀬西区画整理地内遺跡調査団
- 戸田哲也 1997 「関東学院大学小田原校地内遺跡—立野遺跡・駒形遺跡発掘調査報告書—」 関東学院大学用地内遺跡発掘調査団
- 戸田哲也 2003 「神奈川県藤沢市遠藤山崎・遠藤広谷遺跡発掘調査報告」 玉川文化財研究所
- 中野達也 1995 「坊荒句北・坊荒句・立山遺跡」 春日部市遺跡調査会報告書第4集
- 中村信博 2002 「登谷遺跡」 茂木町埋蔵文化財調査報告書第3集
- 仲家三千彦 1998 「徳倉B遺跡」 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第100集
- 並木 隆他 1986 「宮前遺跡」 所沢市文化財調査報告書第18集
- 新津 健 1975 「佐倉道南—繩文時代早期集落址の発掘調査—」 船橋市教育委員会
- 新闇厚他 1988 「法政大学多摩校地遺跡群III-C・R地区-」 法政大学
- 西間木薰他 1983 「唐松A遺跡」 福島県文化財調査報告書第115集
- 西本正憲 2003 「笛見原遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書」 忍野村教育委員会
- 能城秀喜 1994 「林遺跡II」 君津都市文化財センター発掘調査報告書第86集
- 野中和夫他 1995 「峠遺跡」 東伊豆町教育委員会
- 寺田 稔 1987 「上川遺跡」 褐野市教育委員会
- 橋本 勉 1980 「安塚遺跡」 茨城県教育財團文化財調査報告VI
- 橋本富夫 1992 「天神北遺跡(第2次)」 桶川市文化財調査報告書第23集
- 蜂屋孝之 1998 「千葉工業団地埋蔵文化財調査報告書—桜井平遺跡—」 千葉県文化財センター調査報告第321集
- 林原利明 1999 「神奈川県伊勢原市柏上原遺跡発掘調査報告書」 柏上原土地地区画整理事業区域内遺跡埋蔵文化財発掘調査団
- 原川雄二他 2000 「多摩ニュータウン遺跡No.939遺跡II」 東京都埋蔵文化財センター調査報告第81集
- 原川雄二 2004 「多摩ニュータウン遺跡No.237・962・908遺跡」 東京都埋蔵文化財センター調査報告第153集
- 毒島正明 2004 「子母口式土器研究の検討(下)」『土曜考古』第28号 土曜考古学会
- 毒島正明 2005 「ミヲ坂式」「木戸上式」の再提唱について』『土曜考古』第29号 土曜考古学会
- 古内 茂 1980 「吉田馬々台遺跡—繩文早期炉穴址群の調査—」 印旛村教育委員会

- 本間 宏他 1999 「上郷田VI（1次）」 福島県文化財調査報告書第356集
- 牧野光隆 2001 「新井花和田遺跡」 市原市文化財センター調査報告書第74集
- 増子章二 1982 「新作小高台遺跡発掘調査報告書」 川崎市教育委員会
- 松田光太郎 1999 「白久保遺跡」 かながわ考古学財団調査報告60
- 松本 勝他 2004 「玉ノ谷遺跡」 君津都市文化財センター発掘調査報告書第187集
- 馬目順一 1982 「竹之内遺跡」 いわき市埋蔵文化財調査報告第8冊
- 三浦圭介他 1985 「壳場遺跡発掘調査報告書（第3次調査・第4次調査）」 青森県埋蔵文化財調査報告書第93集
- 宮 重行 1981 「木の根」 千葉県文化財センター
- 宮 重行 2004 「東峰御幸畠東遺跡（空港No62遺跡）」 千葉県文化財センター調査報告第483集
- 宮 重行他 2006 「十余三船荷峰遺跡（空港No67遺跡）」 千葉県教育振興財団調査報告第540集
- 宮 重行他 2006 「躰ヶ作遺跡」 千葉県教育振興財団調査報告第532集
- 宮 文子 1998 「大袋腰巻遺跡」 印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第135集
- 村松 譲 2003 「百济木遺跡」 川本町遺跡調査会報告書第8集
- 森田安彦他 1996 「海ヶ沢・富士山・櫻現坂・北方遺跡」 江南町千台遺跡群発掘調査報告書1
- 安岡路洋 1963 「岩槻市鹿室中宿発見の繩文早期末葉の土器」『埼玉考古』復刊第1号 埼玉考古学会
- 山形洋一 1982 「宮ヶ谷塔第5貝塚」 大宮市遺跡調査会報告第5集
- 山田尚友他 2001 「大谷口向原南遺跡第2次」 浦和市遺跡調査会報告書第294集
- 山田仁和 2003 「神奈川県津久井郡城山町向原中村遺跡」 川尻向原土地区画整理事業地内遺跡発掘調査調査報告書
- 山村貴輝 1995 「大越遺跡」 熱海市教育委員会
- 山本孝司他 2004 「多摩ニュータウン遺跡No.351遺跡」 東京都埋蔵文化財センター調査報告第154集
- 吉岡弘樹他 2003 「宮の前遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第207集
- 吉田健司 1985 「叭原遺跡（先土器・繩文時代編）」 川口市文化財調査報告書第23集
- 吉田秀享他 1990 「八重坂A遺跡」 福島県文化財調査報告書第236集
- 薬科泰裕他 2008 「入ノ洞B遺跡」 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第193集

設立30周年記念

研究紀要 第25号

2011

平成23年3月14日 印刷

平成23年3月24日 発行

発行 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台四丁目4番地1

<http://www.saimabun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 株式会社文化新聞社